

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 紫紺の切札 ~

オニキス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 紫紺の切札

### 【Nコード】

N9553Z

### 【作者名】

オニキス

### 【あらすじ】

第13管理外世界。その世界に住むカズマは、自分の居場所を奪った時空管理局に復讐をするため、自らが53枚を束ねる新しい切札となる。しかし、一人の女性との出会いがカズマの運命を変えていく。人間と切札。カズマが最後に選択するカードはどちらか・・・。

切札1：第13管理外世界（前書き）

初作品です。

未熟な文章能力です。

まともなのは、仮面ライダーとなのはに対する愛情だけです。

そんな作者の作品を許せる寛大な方のみご覧ください。

## 切札1：第13管理外世界

第13管理外世界。ここには魔法が存在せず、基本的な文明や文化も地球と同じ。しかし、生物学だけは異常に発展している。

この世界では、人々が異形の脅威にさらされていた。一人の科学者が生物学のさらなる発展のため、不死身生命体 アンデッド - の封印を解放してしまったのだ。

アンデッドを再封印し事態を終息させるため、ある研究機関はライダーシステムと呼ばれる4つのバトルスーツを開発。そして、4人の青少年がライダーシステムの資格者となりアンデッドの再封印を行っていた。

降りしきる雨と轟く雷。その中に、二つの異形が互いに間合いを取って睨み合っている。

??? 「全てのアンデッドは封印された。残るはジョーカー、お前だけだ！」

そう叫ぶのは、十二種の生物のレリーフがついた黄金の鎧を全身に纏い、カブトムシを模した仮面の戦士、ブレイドキングフォーム（以下BK）。

黒い全身に所々に緑のライン。刺刺しい右半身のカミキリムシに酷似した異形にBKは「重醒剣キングラウザー」を構える。

ジョーカー「あああああああああ！！」

ジョーカーと呼ばれた異形は、すさまじいオーラを発し鎌の形をした短剣を手に、BKに切りかかる。

ガキン

BK「はああああああ。ウェイ！」

BKはジョーカーの攻撃をキングラウザーで防ぎ、すかさず渾身の右ストレートを放つ。

BKの攻撃により吹き飛ぶジョーカー。

BKは鎧の5か所のレリーフから5枚のカードが出現させ、それを手に取りキングラウザーに読み込ませる。

「スペード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」

BKは自身の最強の必殺技、ロイヤルストレートフラッシュを発動。莫大なエネルギーを剣に纏わせ、ジョーカーを切りつける。

そのエネルギーにより大爆発が起こる。そしてジョーカーは地面に倒れこみ、全く動かなくなる。

トランプ型のカード、ラウズカードを投げるBK。

アンデッドはいかなる手段でも、どんな攻撃を受けても死なない。  
行動不能状態にはなつたところでラウズカードに封印する。それが  
唯一の対処方法である。

カードに吸い込まれるジョーカー。  
それを手にするBK。

この瞬間、全53体のアンデッドの封印に成功。アンデッド事件が  
終わりを告げる。

しかし、この世界には間もなく新たなる脅威が訪れる。  
そして、一人の少年の運命が大きく歪むことになる。

### 切札1：第13管理外世界（後書き）

小説が、戦闘描写がこんなに難しいとは。

ジョーカー叫んでるだけじゃん。ジョーカーファンの方、ごめんなさい。

ジョーカーの力は主人公が受け継ぎますのでご了承ください。

誤字脱字。未熟な作者へのお叱りの言葉、お待ちしております。

## オリジナル主人公（前書き）

随時更新していきます。

主人公の外見は「ブレイドの世界」の剣立カズマを幼くした感じ  
です。

更新（2011/12/31）

## オリジナル主人公

名前：カズマ

性別：男

外見年齢：17歳（アンデッド化により年齢という概念が無くなった）

出身：第13管理外世界（通称ボード）

性格：本質は明るく優しい

13歳で人類基盤研究所の研究員・スペードのライダーシステムに選ばれた天才。アンデッド事件ではブレイドとして戦った。研究所の唯一の生き残り。

管理外世界で育ったが襲撃した魔導師を調べるうちに、ミッドチルダ・魔法・時空管理局の存在を突き止める。

未熟な次元渡航能力により機動六課の屋外訓練場に偶然たどり着き、自主練中だったフォワードメンバー4人に自身の能力の腕試しとして戦闘を仕掛ける。

高い身体能力とアンデッドの力でフォワードメンバーを圧倒。

しかし、駆け付けた高町なのはとの戦闘になると一転。「スターライイトブレイカ」と「ロイヤルストレートフラッシュ」の打ち合いとなり、その時の攻撃の余波で敷地の外に吹き飛ばされる。

コンボの反動で戦闘不能状態になり、撤退をするが途中で力尽きる。  
海岸で倒れている所、トレーニング中だったノーヴェと出会う。

『EX エクストラ ジョーカー』

カズマが53体のアンデッドの遺伝子と融合した新しいジョーカー。  
外見はオリジナルの緑の部分が青くなっただけ。

オリジナルのように他のアンデッドの姿には変身できないが、53  
枚のラウズカードを所有しているため戦闘力は高い。  
しかし、元が人間なのでスタミナが低い。

カズマはこの力を管理局への復讐に使うつもりだったが、ノーヴェ  
と出合いで変化の兆しが見える。

## オリジナル世界と仲間

『第13管理外世界（通称ボード）』

基本的な文化、文明は地球と同じ。  
生物学だけは異常に発展してる。

ある科学者が、不死身生命体・アンデッドの封印を解く事件（アンデッド事件）が発生するも、4つのライダーシステムによりラウズカードへの再封印に成功。

管理局の最高評議会はこの不死の力に興味を持つ。

『第14管理世界（通称バニティ）』

一応魔法は存在するが、あるにはあるというレベル。  
情報技術、通信技術は非常に発展しており、現在ミッドチルダや時空管理局で使用されている通信機能や情報ツールの7割はこの世界のもの。

バニティ出身者は全員が情報能力とハッキング能力に優れており、管理局も毎年、情報管理者をこの世界からスカウトしている。

ヨシト・プロスペクトはバニティ出身者の中でも異質。  
彼が入局してから、今までパシリ的な扱いだった情報管理部は管理局の中でもかなり強い権限を持つようになった。

『人類基盤研究所』

第13管理外世界における最高レベルの研究所。ライダーシステムの開発、ラウズカードの管理もここで行われていた。

最高評議会はラウズカードを奪うために魔導師を送り込むが、4人のライダーとの戦闘により作戦は失敗。

ラウズカードは守りきるが研究所は壊滅、カズマ以外の研究員も死亡する。

『ライダーシステムの適合者』

サクヤ（享年33歳）

ダイヤのライダー・ギャレンに変身して戦っていた。4大ライダーのリーダー格。

カズマにとっては父親のような存在。

ハジメ（享年33歳）

ハートのライダー・カリスに変身して戦っていた。サクヤ同様、カズマにとっては父親のような存在。

ムツキ（享年23歳）

クラブのライダー・レンゲルに変身して戦っていた。カズマにとっては良き兄貴分。

**武器・コンボ・能力（前書き）**

渡航能力や単体技の詳細を加えました。

（2011/12/31）

## 武器・コンボ・能力

### 武器

EX>エクストラ<ラウザー

カズマが魔道師のデバイス調べ、そのデータを元に開発した専用武器。イメージは、キングラウザーの金の部分が青くなったもの。普段は待機モード（ジョーカーラウザーの形）としてベルトのバックル部分に取り付けられており、戦闘時に取り外して起動させる。

### 次元渡航能力

待機状態のラウザーに手をかざしてエネルギーを注入。あらかじめ設定した座標にある次元世界に自身を転送させる。転送のメカニズムやミッドチルダの座標は、13人の魔導師のデバイスのデータを解析し、そのデータを元にEXラウザーに組み込んだ。

天才・カズマといえど、所詮魔法とは無縁の人間の独学によるものであり、その精度はミッドチルダからすればかなり低い。

設定できる座標は「世界」であり「その世界の特定の場所」までの情報はインプットできない。

「切札4」でティア達の前に転送されたのは只の偶然であり、本来は転送された場所から魔導師や関係施設を探しをするつもりだった。ある意味で運が良く、ある意味で運が悪かったといえる。

コンボ

ファイブカード

4枚のAとジョーカー（黒）を使用。詳細不明

ロイヤルストレートフラッシュ

原作同様スペードの10・J・Q・K・Aを使用。エネルギーを剣に宿して切る、又は放出する。

威力はSSSランクを凌駕する。使用後は強制的に人間に戻り3時間ほど戦闘不能状態になる。

他のスートでも使用できるが、カズマはスペードのみ使用。

ストレートフラッシュ

各スートの2・3・4・5・6を使用。原作とは違い、EXラウザーのみで切る、又はエネルギーを放出する。スペードは雷、ダイヤは炎、ハートは風、クラブは氷属性の技となる。

威力はSランクに匹敵。消費は激しいが戦闘不能状態にはならない。コンボと能力の使用は不可。

フォーカード

原作同様、各スートの6とスペードのKを使用。雷、炎、風、氷属性のエネルギーを剣に宿して切る、又は放出する。

威力はAAAランクに匹敵。上記の技より消費が軽く、使用後もコンボや能力の使用が可能。

能力

原作のKフォーム同様、単体ならラウズせずにアンデッドの能力を発動できる（例：スペードの5「キック」＝強化キック）。エネルギーをほとんど消費せず、戦闘時はこちらがメインとなる。

使用するカードの名前を頭で考えれば自動的に発動。その際、ラウザーからカード名が発せられる。

威力は2〜5がA+ランク、6〜10がAA-ランクに匹敵。

J・Q・K・Aは単体で使用しても効果はない。普段はEXジョーカーの身体能力のエネルギー源となっている。

## 切札2：組織壊滅（前書き）

仮面ライダー剣の第1、2話の脚本タイトルと同じです。

当時、橘役の天野さんはタイトルを見て「え！？いきなり」と思ったそうです。

誤字脱字を修正しました。まだ有りましたらご連絡をください。

（2011/12/31）

会話させるのって難しい。他の小説を参考にしているのですが、うまくいかない。

## 切札2：組織壊滅

カズマ side

第13管理外世界

人類基盤研究所のとある一室。

少年がパソコンと資料と分厚い本に目を通している。

画面や紙面に表示されている内容は、専門用語や複雑な数式のオンパレードで、素人には理解不能である。

カズマ「う〜〜〜と」

少年は疲れたのか思いつきり背伸びをする。

少年の名はカズマ。現在15歳。

13歳でこの世界の最高レベルの大学を飛び級の首席卒業、人類基盤研究所にスカウトされた天才である。

かつて、この世界は一人の科学者が不死身生命体・アンデッドの封印をとき、人々は脅威にさらされていた。その対抗策、ライダーシステムの適合者としてもスカウトされたのだ。

サクヤ「少しは休め。無理しても効率は下がるだけだぞ。」

カズマ「サクヤさん。」

カズマが振り向くと、30代の男性が缶ジュースを彼に渡した。

男性の名はサクヤ。カズマと同じく研究員でライダーシステムの適合者である。

カズマにとっては父親のような存在であり、サクヤも実の息子のようにかわいがっている。

サクヤ「今日はその辺にして、これから飯でもどうだ？ハジメやムツキもさそって」

ハジメもムツキもまた、ライダーシステムの適合者である。

ハジメはサクヤと同じく父親、ムツキは兄貴分としてカズマの面倒をみている。

カズマ「いいですね。行きましょう。」

カズマは、渡されたジュースを飲み干すと、パソコンの電源を切りサクヤと共に部屋を後にする。

アンデッド事件が集結して半年。事件の爪痕は残っているが、人々は、4人のライダーは平穏な日々を過ごしていた。異世界からの脅威が待ち受けていることを知らずに……。

カズマ side out

最高評議会 side

時空管理局のとある一室。

暗闇の中、三つの声が話をしている。姿は見えないが、声からして

3人の男性だとわかる。

男1「アンデッドとかいう不死身生命体。全て封印されたようだが、非常に興味深い」

男2「魔法の無い世界としてしか見ていなかったが。これだけは使えそうだ。」

男3「うまくいけばスカリエッティよりも役立つだろう。すぐに魔導師を送り込む。」

最高評議会 side out

カズマ side

ブレイドキングフォーム「はあはあ・・・こいつらいったい？」

ブレイドキングフォーム（以下BK）に変身したカズマは、肩で息をしながら目の前の状況を理解しようと必死だった。

突如、研究所を襲撃した謎の13人の人間。アンデッドでもライダーシステムでもない。それでも空を飛び、謎の攻撃（魔法を知らないカズマには他の表現ができない）によってライダーシステムを破壊され、絶命したサクヤ、ハジメ、ムツキ。

確かなのは、奴らの狙いがラウズカードであること。奴らが、自分

の大切な人の命を奪ったことの2つ。

魔導師「さて、いい加減君にも退場を願おう」

13人の襲撃者も、ライダーとの戦闘で4人にまで減っていた。4人がBKに一斉攻撃の態勢に入る。

BKといえど、これ以上の攻撃には耐えられない。

BK「うあああああああ!!」

「スピード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」

BKもロイヤルストレートフラッシュを発動させる。

巨大なエネルギーがぶつかり、その余波が周囲を襲う。

剣が、装甲が破壊されていく中、カズマは意識を失った。

カズマ「……!!」

カズマが目を覚ました時、そこにあっただのは信じられない光景だった。

カズマ「嘘だ……」

・ 苦楽を共にしてきた研究員の亡骸 ・

カズマ「うそだ・・・」

- 共に死線を潜り抜け、公私を支えてくれた先輩たちの亡骸 -

カズマ「ウソダ・・・」

- 瓦礫と化した研究所 -

カズマ「ウソダコンナコトオオオオオ!!!!」

瓦礫の山の上で

あふれる悲しみの中

カズマはただ一人叫んでいた。



## 切札2：組織壊滅（後書き）

こんな出来で申し訳ありません。

最高評議会の会話のシーン。もっとカッコいい悪役台詞にしたかったのですが。  
もっと、修行しなければ。

カズマ達を襲撃した13人の魔導師は、全員がAAAランクです。  
近いうちに詳細設定を書きます。

### 切札3：新たなる切札（前書き）

タイトルが「なのは」なのに、なのはが全く登場しない。  
ホントにごめんなさい。

次から、なのは達がカズマと戦います。

### 切札3：新たなる切札

最高評議会 side

魔導師とライダーとの戦闘が終わった翌日。

明りのない部屋で、あの3人の男たちが話し合っていた。

男1「『13人の魔導師』が全滅するとは」

男2「だが、ライダーシステムはもう無い。今なら」

研究所の壊滅、ライダーシステムの全滅により『今なら』カズマから、ラウズカードを奪うのは簡単である。しかし、

男3「いや、ラウズカードはもういい。所詮、魔法のない世界の力。これ以上、戦力を投入して今すぐ手に入れるほどのモノでもない。」

男1「スカリエッティに研究を進めさせる。ラウズカードはその後でいい。」

男たちは、ラウズカードの入手を一時中止。別の計画を進めることにする。

この時、カードを奪っていれば歴史は変わっていたのだろうか？

スカリエッティの裏切りにより、自分たちが抹殺されるのはもう少し先の話。

最高評議会 side out

カズマ side

カタカタカタカタ・・・カチ。

カズマ「よし。これで残るは」

魔導師の襲撃を受けてから2年。カズマは17歳になっていた。現在、彼がいるのは人類基盤研究所の地下13階である。研究所は万が一に備えて、予備の研究施設と全てのバックアップデータを地下に保存していたのだ。

カズマ「皆。俺はもう『そっちに行けないけど』敵は取るから」

そう言つて、カズマはスイッチを入れる。

その瞬間スーパーコンピューターがフル稼働し、カズマに莫大なエネルギーが注入される。

カズマ「っ！！！！！！！！」

悲鳴にすらならない激痛がカズマを襲つ。

カズマは襲撃を受けてから2年間、襲撃者について徹底的に調べた。本来であれば、魔法の無い世界の住人では何もできない。

しかし、襲撃者の武器、襲撃者が現れた場所を調査して得た情報、そして天才的頭脳によって彼は突き止めた。魔法を、時空管理局を、次元世界と渡航方法を。そして、敵の中心がミッドチルダという次元世界にあることを。

本来なら、渡航方法を開発した時点で、すぐにでもミッドチルダに行きたかった。

しかし、それでは奴らには勝てない。自分たちが戦った魔導師は、かなりの実力者だったようだが、彼ら以上の魔導師が存在している可能性も十分にある。

勝つための力。ライダーシステム、Kフォームを凌ぐ究極の力。

彼が行き着いた答えは、『全53体のアンデッドとの融合』だった。

カズマ「がああああああああ！！！！！！」

叫びと共に莫大なエネルギーが放出され、まわりの機材は全て破壊される。

土煙の中から出てきたのは、かつて彼が封印した最強のアンデッド、ジョーカーに酷似していた。

唯一の違いはオリジナルの緑の部分が青くなっていること。

この瞬間、53体のアンデッドの遺伝子を持つ『新しい切札』が誕生した。

その名はEX エクストラ ジョーカー

EXジョーカー「さよなら、皆」

そういつて、周囲の機会を完全に破壊し、驚異的な跳躍力で地上に出るEXジョーカー。

EXジョーカー「待っている、時空管理局」

そう言つて、EXジョーカーはベルトのバックルに両手をかざしエ  
ネルギーを集約。

次の瞬間、その体は青い光となつて異次元へと消えていく。

青年は自らを異形に変え、故郷を捨て、ミッドチルダを目指す。

### 切札3：新たなる切札（後書き）

この作品のヒロインはノーヴェエです。

なのはすら出てきてないのに、何言ってるのこイツとお思いでしょう。

でも、ノーヴェエをヒロインとして設定やストーリー構成をしています。

（ だったら、せめてスバルがギン姉ぐらい出せよダメ作者！ ）

ノーヴェエの登場は次回からです。

## 13人の魔導師(前書き)

全員同じ設定です。

所々あった誤字を修正しました(2011・12・31)

## 13人の魔導師

名前：「13人の魔導師」

（各個人に名前は無い。戸籍も抹消され、常に13人で任務を行うのでこのように呼ばれている）

魔道士ランク：空戦AAA-

所有デバイス：ストレージデバイス（通常のモノよりも処理速度は遥かに速い）

所属：最高評議会

出生：児童養護施設から魔法資質の高い子供を拉致監禁。違法実験により強化、教育により誕生。

備考

最高評議会が操る魔導師集団。管理局でもその存在は噂されていたが、詳細を知る者はいない。出会ったが最後、確実に抹殺されるからである。

個々の戦闘力も高いが、真に恐るべきは徹底した集団攻撃。

半数が防御魔法やバインド、誘導弾により相手の動きを封じ、残りが超火力砲撃魔法で仕留める。

戦法こそシンプルだが、個々の高い能力と特別性デバイスによる高速処理により

超高速の魔法戦を展開し、Sランク以上の魔導師さえ抹殺してきた。

4つのライダーシステムとの戦闘で全員死亡。

ラウズカードの入手には失敗したものの、カズマ以外のライダーと研究員の抹殺、人類基盤研究所とライダーシステムの完全破壊など、その強さは本物。

過去にも2、3人が死亡するケースは多々あり、そのたびに補充をしていた。

全滅したのは今回が初めてであり、最高評議会にとって大打撃となる。

最高評議会は「また作ればいい」と言っているが、内心かなり焦っている。

## 切札4：魔導師VS切札（前書き）

ラウザーの設定に次元世界への渡航法を加えました。  
単体技についても、威力と発動法を加えました。

## 切札4：魔導師VS切札

フォアアードside

〈機動六課・屋外訓練場〉

雨の中、4人の少年少女+ が何かを話し合っていた。

オレンジ色の髪をツインテールにしている女性、ティアナ・ランスター。

彼女がリーダー格なのか、中心となって話を進めている。

青髪のシヨウトヘアの女性、スバル・ナカジマ

赤髪の短髪少年、エリオ・モンディアル

ピンク髪のシヨウトヘアの少女、キャロル・ルシエ  
彼女の使役する白い小型の龍、フリードヒリ

彼女らは現在、悪天候における戦闘パターンの確認をしている。

JS ジェイル・スカリエッティ 事件が解決し、  
試験導入された機動六課も解散の日が近づいていた。

解散後も、それぞれの進路先で様々な任務が待ち受けている。  
そのために彼女らは、平穏な中でも日々訓練を行っていた。

ティア「それじゃ、始めるわよ」

スバル・エリオ・キャロ「OK！（はい！）」  
フリード「きゅくう」

確認が終了し、各自デバイスとバリアジャケットと展開。  
訓練を開始しようとしたその時  
彼女たちの目の前に青い発光体が舞い降りた。

フォアードsideout

EXジョーカーside

青い光が消え、そこには一体の異形が立っていた。  
黒い全身に青いライン、そして刺刺しい右半身。  
その姿はカミキリムシに酷似している。

スバル「ティ、ティア。何なのアレ？」

ティア「分かるわけないでしょ。分かるのは明らかにヤバい奴って

だけ！」

突如出現した禍々しい異形。

フォーワードメンバーに混乱が起こる。

それを無言で見つめるEXジョーカー

EXジョーカー（こいつらも魔導師か？）

かつて、自分が戦った魔導師とは武器も服装も違う。

何より実力が違う。目の前にいる少女達は、それなりに強いようだが奴らには及ばない。

そして異形を目の前にして先制攻撃をするわけでも、防御態勢に入るわけでもなく、事態を理解しきれず混乱していた。

EXジョーカー（実力は有るが経験値が低いつてことか。腕試しにはちょうど良い。）

管理局の全容を把握しきれない現在、目の前の魔道士は腕試しにはちょうど良い。

そう判断したEXジョーカーは、バックルから待機状態のラウザーを取り外し機動させ、大剣型の専用武器「EXラウザー」を手にして構える。

ティア「デバイス！？皆！」

スバル・エリオ・キャロ「！！！！！！」

未熟とはいえ死線を潜り抜けてきた4人は、混乱の中でも敵が攻撃態勢に入ったことを理解し、迎え撃つためにディバイスを構え戦闘態勢を取る。

しかし

「MACH」

フォアード「くくくえっ!?」「」「」

EXジョーカーが所有する53枚のカードの1つ、?9を発動。  
ティアの目の前に高速移動して

ティア「がはっ!」

ティアの腹に左足でキックを放つ。

防御できなかったティアは、諸に受け数メートル吹っ飛ぶ。

スバル「ティア!このおっ!!」

エリオ「はっ!!」

スバルはリボルバーナックルでの右ストレート、エリオはストライダで切りかかるが

スバル・エリオ「そんな」

EXジョーカーは左手でリボルバーナックルを、右手のEXラウザーでストライダを受け止める。

EXジョーカー「るあっ!!」

スバル・エリオ「ごほっ!!」

EXジョーカーはスバルを左の裏拳、エリオをEXラウザーの柄の部分で殴り

「THUNDER」

?6を発動させ、雷を纏った剣でスバルとエリオに切りかかる。

二人は防御魔法を発動するが、パワーに圧倒されそのまま吹き飛ば

キャロ「フリード!!」

自身の魔力を注入し、フリードの口から火炎砲が放たれ

ティア「ヴァリアブルバレット」

ティアも蹴られた部分を抑えながら射撃魔法を放つ。

「REFLECT」

EXジョーカーはその場を動くことなく?8を発動。バリアを発生させ攻撃を跳ね返し2人に命中する。

高出力攻撃が仇となり、その場に倒れこむ。

EXジョーカー「ウウアアアアアアア!!」

叫びと共にすさまじいオーラを発する。

そのオーラと僅かな戦闘で圧倒され、4人は敵との力の差を理解してしまふ。

その時

なのは「そこまでだよ」

栗色の髪の毛をサイドポニーにした、白服の女性が空中からEXジョーカーにデバイスを向ける。

なのは「デバライインバスタアアア!!!」

桜色のエネルギーがEXジョーカーに放たれ

EX「!?!?ぐあああああ!!!」

ラウスカードの能力の発動が間に合わず直撃を受ける

なのは「皆、大丈夫?」

フォワード「……はい」「……」

ティアはキャロを、スバルはエリオを抱きかかえ地上に降りたなのはの元に集まる。

高町なのは

時空管理局の魔導師の中でも屈指の実力者。

現在は機動六課スターズ部隊の隊長兼教官でもある。

自主練の様子を見に来たところ

フォワードメンバーが謎の異形と戦闘し、圧倒されているところに

遭遇。

彼女らを救うべく異形に砲撃魔法を放った。

「FIRE」

直撃を受け、吹っ飛んだEXジョーカーは体制を立て直し？6を発動。

火炎弾をなのはに放つ。

なのははフォワードの前に立ってシールドを展開。攻撃をカードする。

エリオ「雷だけじゃなく炎まで!？」

先ほど雷属性攻撃を行ったEXジョーカーを、エリオは自分と同じ雷の魔力変換資質を持つ生命体だと思った。魔力変換は、一人につき一つの属性が基本であり、複数の属性は非常に稀である。

そのため、雷以外に炎属性の攻撃を行ったEXジョーカーに驚きを隠せない。エリオ以外のフォワードメンバーも同じ考えである。

もともとEXジョーカーは魔道師ではないのだから、魔法が当たり前の世界に身置く人間には、異能≡魔法という考えが浸透しきっている。

なのは「レイジングハート」

レイジングハート「オーライ、マイマスター」

なのはのインテリジェントデバイス、レイジングハートがカードリ

ツジを3発消費。大技の発動に入る。

なのは「皆、離れて」

JS事件を解決し成長したフォアードメンバーを圧倒。

自分の砲撃を諸にくらい、それでもすぐに反撃をしてきた謎の異形。一気に制圧する必要があると判断するなのは。

フォアードメンバーもなのはの考えを理解し、攻撃に巻き込まれないようなのはから離れていく。

なのは「全力：全開!!!」

先ほどとは比べ物にならないエネルギーが集約される。

EXジョーカーは、単体技では防ぎきれないと判断。

五枚のラウズカードを取り出す。

なのは「スタアアライトオオオ」

「スピード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」  
カードをEXラウザーに読み込ませるEXジョーカー

なのは「ブレイカアアアアア!!!」

EXジョーカー「ルアアアアアアア!!!」

ズドオオオオオオオオオオ!!!

桜色と青色の莫大なエネルギーぶつかり合う

EXジョーカー「ウツ…グウアアアアアア」

その衝撃で機動六課の敷地外に吹き飛ぶEXジョーカー

カズマ「まずい！」

人間体になってしまったカズマ。

素顔を見られれば面倒なことになる。

傷口から流れる緑の血

土煙で今は自分を見失っているだろうが、雨ですぐに煙がはれる。

追手が来る前にここを離れなければ。

幸い雨で血痕も流れ匂いも消える。

カズマ「今回は…これで良しとするか」

ティアナ達を圧倒した時点で、施設の破壊とそこにいる魔導師の抹殺も考えた矢先、思わぬ実力者との遭遇。撤退するのは癪だが、相手の切札の一端を知ることができた。

技の反動で激しい疲労に襲われる体を動かし、カズマは機動六課を離れるのであった。

その日、一体の異形が機動六課に少しの混乱と不安を与えた。

EXジョーカー side out

??? side

ミッドチルダ・海岸沿い

???「しつかりしろ、大丈夫か?おい!」

カズマ「はっ!」

自分に語りかける女性の声に反応し、目を覚ますカズマ。  
しかし

ガン!!

カズマ・???「いつてええええ」

互いの距離が近かったようで、互いに思いっきり頭をぶつける

???「何すんだよ!!」

女性は涙目で痛めた個所を抑えつつ、カズマに掴み掛る。

カズマ「えっ?あ、えつとごめん。てゆうか誰?」

戸惑いつつもとりあえず謝罪し、名前を尋ねる。が

ノーヴェ「あたしはノーヴェ・ナカジマ。っておい!」

名前を聞いておきながら、間合いを取りファイティングポーズを構

える青年に、ノーヴェはムツトする。

ノーヴェ・ナカジマ

後に彼女が、カズマの狂った運命を変えていくことになる。

しかし、二人の出会いは波乱の状況で始まったのだった。



#### 切札4：魔導師VS切札（後書き）

一つのストーリーで、理想の文字数は何文字なのでしょう？  
アドバイスがありましたらお願いいたします。

最後に、カズマがファイティングポーズ（仮面ライダー THE  
FIRSTの1号のポーズを想像ください）を取ったのは、ノー  
ヴェとスバルを見間違えたからです。  
剣崎一真の早とちりな部分を受け継がせてみました。

切札5：ノーヴェの災難（前書き）

新年おめでとうございます。

元副会長様

ご意見をいただき、ありがとうございます。

ご指摘の通り、設定を生かせない文章力でお恥ずかしい限りです。元副会長様を始め、他の作家さんを参考に日々精進していきます。これからも、ご指摘やお叱りの言葉を頂ければ幸いです。

## 切札5：ノーヴェエの災難

（ミッドチルダ・海岸沿い）

カズマ s i d e

ここには現在、女性に対しファイティングポーズを構える青年とそれに対し、不機嫌さ全開の女性という奇妙な光景がある。

カズマ（アンデッドのくせに倒れるとは情けない。しかし、もう追手がくるとは）

必殺技の反動でカズマは凄まじい疲労感に襲われた。

その体を引きずって少しでも機動六課を離れようとするも海岸で力尽き、

そこを目の前の女性に起こされたようだ。

自分が襲った女性に（カズマの勘違い）

ノーヴェエ「オイ！人に頭突きして、いきなり喧嘩の構え取ってんじやねえ！人の名前聞いたんなら聞け！そしてオマエも名乗れ！」

倒れている所を助けようとしたのにいきなり頭突きされ、おまけに何故かファイティングポーズまでとられ、怒りを顔にするノーヴェエ。

彼女の名はノーヴェエ・ナカジマ。

カズマが襲ったフォアードメンバーの一人、スバル・ナカジマの妹。二人は容姿が非常に似ており、違いといえば、青髪のスバルに対しノーヴェエは赤髪であるということぐらいだ。家族や知人なら他にも

違いをよく知っているのだが、初対面だと双子と勘違いする者もいる。

そのためカズマは、スバルが自分を追ってきたものだと思い込み、攻撃の構えをとっているのだ。  
しかし、

カズマ（…よく見ると髪の色が違う。別人？）  
冷静に見ると自分が襲った者とは別人であることが分かる。

勝手に勘違いをして勝手に冷静になるカズマ。ノーヴェの怒も右から左。

カズマ「すまなかった。人違いだ。」  
構えを解いて謝罪し、その場を去ろうとする。

そこえ、

ノーヴェ「だ…かあ…らあ…、話を聞けえ！！！」  
元々短気な性格のノーヴェ。

尋ねておきながら話を聞かず、その場を去ろうとするカズマに怒りが爆発。  
渾身のとび蹴りをカズマに放つ。

カズマ「ごぶばあ！？」  
攻撃を諸に受け、吹っ飛びそのまま倒れる。

ノーヴェ「どうだこの野郎。話を聞く気になったか！」  
見事な蹴りを食らわせたノーヴェは、カズマに人差し指を向け言い

放つ。

しかし、カズマは倒れたまま動かない。

ノーヴェ「…？どうした、そこまで強く蹴ってないぞ？」

ノーヴェは自分の『普通じゃない力』をよく理解している。

どんなに腹が立っても、見ず知らずの一般人を全力で蹴るほど野蛮でも愚かでもない。そのため、いっこうに起きないカズマが心配になり駆け寄る。すると、

カズマ「ZZZZZZ…」

眠っていた。

ノーヴェ「なっ…なんなんだよコイツorz」

変な奴に関わってしまった。

怒りを通り越し、困惑するノーヴェであった。

カズマ side out

〈機動六課・会議室〉

はやて side

はやて「一体何なん、この怪物？」

関西弁を話す女性は、八神はやて。

機動六課の設立者であり、部隊長。なのはの幼馴染でもある。

フォワードメンバーのデバイスと監視カメラに記録されていた、EXジョーカーを観て率直な感想を上げる。

シグナム「高速移動に、ティアとフリードの攻撃を同時に反射するシールド、そして雷と炎の攻撃。デタラメとしか言いようがありません。」

そう答えるのは、はやてを守る守護騎士の一人、シグナム。

カズマがEXジョーカーとなり、なのはやフォワードメンバーと戦った後、機動六課には混乱が起こっていた。突如起こった大爆発。駆け付けると、そこには怪我を負っているティア達。そして、愛機のレイジングハートが損傷しティア達以上に怪我をして気を失っているのは。

すぐに消火活動が行われ、なのは達も病院に運ばれた。その時、テ

イア達から謎の生命体が突如現れ、戦闘になったことがはやてに伝わり、現在、残された映像を元に緊急会議が開かれている。

スターズの副隊長でありシグナムと同じく守護騎士の一人、ヴィータ・ライトニングの隊長であり、はやてやなのはの幼馴染フェイト・T・ハラオウン

本来はこの2名も参加するところだが、なのは達のお見舞いと、ティア達から当時の詳しい事情を聞くため病院に向かっており不在。会議に参加しているのは、はやて、シグナム、そしてデバイスマスターのシャリオ・フィニーノ（通称シャーリー）の3名となっている。

残りのメンバーは、現場の後片付けや謎の生命体に関する手掛かりを捜索中である。

シグナム「シャーリー、そっちは何か分かったか？」

映像からEXジョーカーの能力分析をしているシャーリーに問いかける。

シャーリー「はい。まず、ティア達との戦闘で使った能力ですが、魔力で『例えると』どれもA〜AAランクに匹敵します。」

分析が終了し答えるシャーリー

はやて「『例える』ってどういうことや？」

「魔力」と言い切らない言葉に疑問を持つはやて。

シャーリー「分析の結果、この生命体からも使用した能力からも魔力反応は一切ありませんでした。」

はやて「そんな!…あつごめんな。続けて」  
思わぬ結果に驚くが、話の続きを優先させる。

シャーリー「はい。そしてなのはさんとの戦闘で放ったエネルギーですが。これは、SSSランクを超えています。スターライトブレイカーで相殺していなければ、あの程度の怪我では…」

はやて・シグナム「なっ!?!」

SSSランクは魔導師の魔力ランクの中でも最高峰。それを超えていると聞かされ、驚きが脅威に変わる。

同時に、

シグナム「もし、他の魔法を使っていたら高町は…」

スターライトブレイカーで相殺してあのダメージ。

他の魔法や下手にシールドを張って対処していたら。

そう思うと、背筋が凍る。

はやて「とにかく、情報が必要や。ヴィータ達が戻ってきたら、もう一度会議や。」

シグナム同様、最悪の想像をしてしまったはやては、イメージを振り払うように言うのであった。

はやて side out

ノールヴエ side

〈ナカジマ家・客室〉

「止・・・カ・・・」

誰かが俺に語りかける

「そんな・・・し・・・いけない」

「ロイヤルストレートフラッシュ」  
構わずコンボを発動する俺

ロイヤルストレートフラッシュが本来の力を発揮しない

「俺がさせない」

俺は、この声を知っている

お前は・・・キング？

カズマ「！？ここは？」

目覚めると見知らぬ部屋

何故か上半身裸で、包帯が巻かれている

ノーヴェ「よお、お目覚めか？」

声のした方を見るとノーヴェが椅子に座っていた

カズマ「アンタは・・・痛って！」

ノーヴェ「ノーヴェ・ナカジマだ。宜しくね。」

額に血管を浮かべた満面の笑みで、カズマの手を強く握る。

そういえば、自分から名前を聞いてほつたらかしたったな。  
今更気づくカズマは、自分も名乗ることにする。

カズマ「俺はカズマ。この包帯は？」

ノーヴェ「オマエ、所々傷があったからな。そんなのが目の前で倒  
れられてほつとけるかよ。せいぜい感謝しろよ。」

カズマが倒れてからの経緯を話すノーヴェ。最後に、「本当はボコ  
ボコにして、立ち去っても良かったんだけどな」とつけ加える。

カズマ「そうか。すまない。嫌な思いさせた上、迷惑を掛けてしまった」

ノーヴェ「ノノ調子狂うな。そう素直にされると。」  
頬を軽く搔くノーヴェは、治療中に気になったことをカズマに尋ねる。

ノーヴェ「見たぞ。緑の血。身分証明も無かつたし、オマエ何者だ？」

服を着ていたカズマは、その言葉に思わず固まる。  
どうしたものかと考える中

ノーヴェ「いかにも訳ありって感じだな。まあいいや。とりあえずもうすぐアタシの家族が戻ってくる。管理局の人間なんだけど安心しろよ。アタシみたいな『訳あり』でも受け入れてくれる奴らだからさ。」

カズマ「アンタも『訳あり』なのか？」  
管理局という言葉に一瞬警戒するも、そのあとの『訳あり』という言葉が気になるカズマ。

ノーヴェ「…とにかく！アタシが安心しろって言ってたんだ。管理局が嫌なのは分かっけど、大丈夫だから大人しくしてる。わかったな！」

何となく居づらくなったノーヴェは部屋を出て、カズマのために軽食を準備するためキッチンに向かう。

「ナカジマ家・キッチン」

ノーヴェ「変な奴を拾うし、トレーニングは中止するはめになるし、今日は厄日か？」

ぶつくさ言いながら、カズマの軽食を準備するノーヴェ

チンク・デイエチ・ウエンディ「……ただいま（ツス）」

そこに、姉妹達が帰宅する。そこに父親のゲンヤと姉のギンガの姿はない。

ノーヴェ「お帰り。お父さんとギンガさんは」

チンク「二人は遅くなるそうだ。六課で事件があったらしく応援に行っている」

姉の返答に、局員の二人に相談をする当てが外れる。

デイエチ「誰か来てるの？」

ノーヴェ「ああ。トレーニング中に怪我人を見つけてき。訳ありそうだったから、家に連れてきて手当したんだ。お父さんたちに話を聞いてもらうつもりだったんだけどしかたない。」

とりあえず、姉妹たちを紹介しようとして軽食を持って客室に向かう。

そこには

4人「……？」

誰も居なかった

ウエンディ「わかったツス」  
唐突に声を上げるウエンディ

ウエンディ「ノーヴェ。本当は怪我人じゃなくて彼氏を連れてたツ  
スね。」

チンク・デイエチ「彼氏!?!」

ウエンディの言葉に啞然とする二人。

ノーヴェはわなわな震えている。

ウエンディ「そうツス。そと男は彼女の家に来たまでは良かったけど家族が返ってきたのを…ぐはあ。」  
ウエンディを黙らせるノーヴェ

ノーヴェ「あんのバカア…」

チンク・デイエチ「ノ・ノーヴェ?」

恐る恐る尋ねる二人。しかし、

ノーヴェ「おとなしくしとけっつだたるうがあああ!?!」

怒りが爆発し、暴れまわるノーヴェ

それを止めるチンクとデイエチ

ウエンディ「男が凄いのか、ノーヴェ大胆なのか…」

完全にノーヴェの彼氏説になっているウエンディ

ノーヴェの災難な一日はこうして終わっていく。

ノーヴェ side out

カズマ side

ミッドチルダ・都外

カズマはノーヴェが部屋を出た後、EXジョーカーに変身し？10  
「THIEF」の力で姿と気配を消し、ナカジマ家を離れていた。

カズマ「彼女の『訳あり』って…」  
ノーヴェの自分も『訳あり』という言葉が、ほんの少しだけ気にな  
っていた。

本来、すぐにでもEXジョーカーの力で管理局に復讐するつもりだったカズマ。

しかし、

高町なのはという思わぬ強敵との遭遇。

ノーヴェ・ナカジマという何となく気になってしまった女性。

かつての戦いで協力者「キング」の幻。

イレギュラーの連続でカズマの復讐劇のスタートは失敗に終わる。

カズマ「まずは情報収集といくか。」

カズマは焦ってなかった。

生物学の発展した世界で育った彼はわかっていた。

- 自然界で勝ち残れるのは強い奴だけではない -
- 自分の未熟さを認め、失敗から学び変わるもの -

自分の知らない「魔法」を学ぶ

自分の知らない「ミッドチルダ」について学ぶ

今は学ぶことが重要だと。

カズマは一人、暗闇に消えていくのであった。



## 切札5：ノーヴェの災難（後書き）

この作品に、仮面ライダーが登場する予定はありません。過去編や回想シーンには出てきませんが。

カズマはEXジョーカーとして戦っていきます。

なのはと仮面ライダーのコラボ作品の多い中、少しでも差別化を図るための苦肉の策です。

小細工なしで、他の作家さんと戦える力が欲しい。

切札6：摘発（前書き）

カズマが図書館で急速に知識を付けていく場面。

思いつきりMOVIE対戦COREのノブナガを真似してます。

私もあんな頭が欲しい。

## 切札6：摘発

（ミッドチルダ・図書館）

カズマ side

カズマは現在、ミッドチルダでも都内有数の大型図書館にいる。

ナカジマ家を後にしたカズマは、都内の駅に向かい交番を探していた。

地理を全く知らない世界だが「駅の近くに交番もある」とう、自分の世界の常識の元に行動し、実際に交番が見つかった。そこで、都内で一番大きい図書館の場所を聞きいたのである。

従業員1「また、あいつ来てるよ。今日は何調べてんの？」

従業員2「転送技術に関する本みたい。かなり専門的なヤツ。」

カズマがいる図書館は幅広い分野の書籍を有し、レベルも入門編から専門家が扱うレベルまで幅広い。

彼がここに通うようになって今日で5日目。今は、転送技術に関して勉強中である。専門家が読むようなハイレベルな本を読んでおり、10冊以上の本が周りに積まれている。

初日こそ従業員は、本を独占しないよう注意をしていた。しかし、カズマの本を読むスピードが尋常でなく積み上げた本もすぐに元に戻す。その際、再び大量の本を抱えてくるが、やはりすぐに読んで戻すので他のお客からクレームが来ることはなかった。

カズマはこれまで、魔法、ミッドチルダ、時空管理について学びつくし、転送技術に関しても今終わった。そして、本を元に戻し新しい分野のコーナーに移動する。

従業員1「今度は何だ？」

カズマは常に入門編から入り短時間で専門レベルに達し、新しい分野に行く。

次は何について学び何時間でクリアするのか。

従業員の間では、カズマの観察が流行っていた。

カズマ「目印は…この建物か…」

従業員の予想を裏切り、カズマはただの地図を広げ何かを確認していた。

そして、一人納得すると元に戻し図書館を後にする。

その後、カズマを図書館で見たものはいない。

カズマ side out

（機動六課・会議室）

六課 side

はやて「ほんなら会議をはじめで。手元の資料を見てな。部隊長の言葉で全員が資料に目を向ける。」

会議に参加しているのは

はやて、フェイト、シグナム、ヴィータ

ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディの9名である。

解散間近の機動六課だが仕事は常にやってくる。

EXジョーカーの襲撃により、なのはが全治一か月、ティア達も最低3週間の入院となり六課は大幅な戦力ダウンを強いられていた。万年人手不足、ましてや解散寸前の部署にティア達に匹敵する戦力を貸してくれる所などない。

そんな戦力不足に悩んでいたはやてを救ったのが、ギンガ達だ。

ギンガは六課と交友関係にある108部隊に属しており、真っ先に援軍を名乗り出た。

また、ナカジマ家に引き取られたノーヴェ達も

「更生の機会をくれた人達に恩返しをしたい」と協力を申し出のだ。

ノーヴェ達に関しては、異論の声が各方面からあったがすぐに消えた。

「文句が有るなら私とOHANASIする？」

どす黒い笑顔をした包帯だらけの魔王の動画が、異論を唱えた部署に贈られたとか。

はやて「今回摘発する研究所は、ロストロギアをつかった違法な生体実験を行うとる。このロストロギアは最近見つかったもので正式名は無いんやけど、細胞の強化や全く別のモノに進化させる力があるらしいんや。」

フエイト「…生体実験…」

その言葉に不快感を抱くフエイト。ギンガやナンバーズも同じようだ。出生が特殊な彼女らは、こういうことに人一倍敏感である。

ヴィータ「なあ。この前なのは達を襲った奴って、この研究所が送り込んできたんじゃねえのか？」

一通り資料に目を通し、EXジョーカーと研究所の関係を疑うヴィータ。

シグナム「摘発を目前にしての事だからな。可能性はあるが、何故あれ以来何もしかけてこない？」

はやて「なのはちゃんとの戦闘で相手も重傷を負ったとか？」

ギンガ「だったらすぐにも場所を変えるのでは？資料によると、襲撃から5日たっても移動した形跡はないようですよ。」

違法実験をする研究所

摘発を目前にした六課への襲撃

魔力を持たない謎の生命体

細胞を別のモノへ進化させるロストロギア

これだけなら、研究所が実験で作り出した生命体を使い六課を襲撃したと考えられる。

しかし決め手になる根拠もなく、何故研究所を変えないのかという疑問がでてくる。

「はやて」なんにしても動いてへんなら研究所を摘発するチャンスや。あの生命体が重傷で動けんなら尚更な。今夜、一斉摘発に向かうで。」

相手が動かない今がチャンス。その考えに全員が賛同し摘発する段取りが進む。

六課 side out

〈違法研究所・出入口付近〉

はやてside

日が落ちかけ、夜に差し掛かるうとしている。

ノーヴェ「裏出入口、現在以上無し」

ディエチ「こちらと同じく以上ありません」

はやて「了解や。完全に日が落ちたら、うちらが正面から突入する。裏はまかせたで。」

通信で現状を確認する。

研究所は、都市から離れた廃墟や無人の工場が並び立つ場所にある。道路沿にトラックも出入りする正面出入口があり、はやてを初めとする六課の主要メンバーが付近で待機中。

他に裏口が2か所あり、ギンガ・ノーヴェ組、チンク・ディエチ・ウエンディ組の二手に分かれている。

主要メンバーが正面から突入し一気に摘発。裏口から逃げる者は応援組が対処する手筈だ。

しかし、

ズゴオオオオオオオオオン！！

日が落ちるのを待っていたその時、突如研究所が爆発する。

はやて「なんや！？チンク、ウエンデイ、デイエチ無事か？」

突然の爆発に驚きながら近くに待機をしていた3人の安否を確認する。

チンク「我々は無事だ。しかし一体……！研究員が何名か出てきたぞ！」

はやて「チンクはそいつらを捕まえて事情を聞くんや。ウエンデイとデイエチは救助隊が来るまで、ライディングボートとイノメースカノンで消火活動！」

チンク・デイエチ「了解」

ウエンデイ「任せるっス」

指示を受け、それぞれ逮捕と消火活動に向かう。

はやて「キング・ノーヴェ聞こえるか？」

キング「はやてさん。これはいったい？」

はやて「詳しいことはわからん。今、ウエンデイ達が消火活動をおこなつとる。2人はウイングロードとエアライナーで上空から搜索。逃亡者を見つけてほしい速……」

ヴィータ「はやて！」



二人は近くに向かう

研究員「た、助けしてくれええええ！」

天井が吹き飛んだことで、悲鳴が外まで聞こえる。

それを聞いて急ぐ二人

そこにいたのは

ノーヴェ「あいつは！」

研究員を左手で持ち上げるEXジョーカー

右手には大きな袋に何やら大量に詰め込んで持っている

ギンガ「例の生命体！」

研究員の元に降り立つ二人

EXジョーカー「!？」

ギンガ「え〜っと。言葉が通じるか分からないけど…管理局の者です。その人を直ちに話してください。」

通じるとは思えないが、とりあえず言ってみる。

EXジョーカー「ふん!!！」

研究員を思い切り投げ飛ばすEXジョーカー

研究員は壁に激突し気絶する

そして、ラウザーをバックルから取り外しEXラウザーを起動させ構える。

ノーヴェ「てめえ!!」

EXジョーカーの行為を挑発と受け取り怒るノーヴェ

ギンガ「落ち着いてノーヴェ。こいつは…」

ノーヴェ「分かってるよ!能力全てがAランクを超えてること…そして…バカ姉貴を病院送りにしたことなあ!!」

ノーヴェはEXジョーカーの話聞いたとき恐怖を覚えた。

しかし、それ以上にスバルを傷付けた事が許せなかった。

普段はバカみたいにニコニコして、やたらベタベタくっついてきて正直うっとうしと思うこともある。それでも、新しい姉のことが好きだ。戦闘機人だろうと関係ないと言わんばかりの明るさを持つ姉を尊敬している。

家族を傷付けられた怒りが恐怖を凌駕していた。

ギンガ「ノーヴェ…それだけ分かっただけ大丈夫ね。」

ノーヴェの怒りはスバルがEXジョーカーにやられたことを聞いたときから感じていた。ここでEXジョーカーと遭遇したときは、怒り任せに突っ込むのではないかと心配した。しかし、怒りの中にも冷静に間合いを取って、攻撃に備えているのを見て安心した。

そして今度は自分も構えを取る。そして、闘志を向ける。

大切な妹を傷付けた未知の異形に。

夜の暗闇を炎が赤く照らす

燃え盛る炎の中

二人の機人と

『一匹』のアンデッドが睨みあっていた

## 切札6：摘発（後書き）

戦闘シーンまで持っていけなかったorz

次回にお預けです。

恋愛フラグではありませんが、カズマとノーヴェの繋がりも次回から強めていきます。

切札7：一人の機人、一匹の切札（前書き）

聖徳太子様

感想及び、誤字脱字のご指摘。有難うございます。

ご期待に答えられるよう頑張っていきます。

## 切札7：一人の機人、一匹の切札

（違法研究所の一室）

ノーヴェ side

燃え盛る炎の中

EXラウザーを構えるEXジョーカー

対するは、デバイスを起動させたギンガとノーヴェ

睨み合いが続く中、先に動いたのは

ギンガ「はああああ！」

ノーヴェ「うりゃあ！」

ギンガとノーヴェ

それぞれブリッツツキヤリバーとジェットエッジを加速させ

その勢いを利用し、魔力を込めた拳を放つ

ズガン！！

EXジョーカー「ふん！」

若干勢いに押されるが、EXラウザーで攻撃を受け止め  
二人の拳を上払い、切りつける。

ギンガ「っく」

ノーヴェ「っつ」

二人はシールドを発生させると同時に後ろに跳び威力を軽減する。  
ノーヴェは反応が一瞬遅れ、左腕を切られるがダメージはゼロに近い。

「TACKLE」

EXジョーカー「グラアアア！」

二人が距離を取るとすかさず？4を発動  
青いオーラを纏って突進していく

ノーヴェ「んなもんだたるかあ」

エアライナーを展開しノーヴェは上空に回避

ギンガもブリッツツキヤリバーを加速させ回避する

？4は突進力を強化する能力

EXジョーカーはその勢いを止めようと一瞬動きが止まる

ノーヴェ「どりやあああああ！！」

一瞬の隙をつき、蹴りのラッシュを浴びせる

そして

ノーヴェ「でりやあああ！！」

怒涛のラッシュの後、魔力を集約した特大の蹴りをくらわせる

吹き飛ばされるEXジョーカー

しかし攻撃は終わらない

ギンガ「リボルバアアシユウウト！！！」

ノーヴェの攻撃中に魔力を蓄えていたギンガは

吹き飛んできたEXジョーカーに攻撃魔法を叩き込む

EXジョーカーはその勢いのまま壁に激突する

ノーヴェ「っしゃあ」

連携攻撃が決まり喜ぶノーヴェ

ギンガの元に行こうとした

その時

「BIO」

?7が発動

ノーヴェ「何!?!」

気の緩んだノーヴェを触手が絡め取る

ギンガ「なっ! 攻撃が効いていない?」

あれだけ攻撃を受けてもダメージを負った様子は無く  
平然としているEXジョーカーに驚く

EXジョーカー「ふんっ」

ノーヴェ「うわあ」

ギンガ「ノーヴェ! つく!」

触手で縛ったノーヴェを自分の元に引き寄せせるEXジョーカー  
ギンガはノーヴェの体を掴もうとするが間に合わず  
EXジョーカーの元に引き寄せられる



フェイト「オーラだけでも凄い威圧感。」

話には聞いていても、対面して改めてその危険性を感じ取れる  
それだけ凶悪なオーラを発していた

ヴィータ「一気にケリつけないと不利だな…皆！」

長期戦は不利と判断し、一気に倒す作戦を伝えるヴィータ  
EXジョーカーに人語を理解する知能の有無はヴィータ達には判断  
できないが、念のため念話で伝えている

フェイト「今の戦力だと、それが現実的だね。」

ヴィータ「奴はなのはのSLB以上の能力も持っている。十分注意  
しろ。いいな！！」

ギンガ・ノーヴェ「了解！！」

各自四方に分かれ、フェイトは空中から得意の高速戦で攪乱  
ギンガとノーヴェはウィングロードとエアライナーで立体的に移動し  
牽制弾や誘導弾でEXジョーカーの動きを制限  
ヴィータは空中から様子を伺っている

「RABID」

EXジョーカー「ガアアアアアアア！！」

？4の能力でEXラウザーからマシンガンのようにエネルギー弾を  
連射

しかし、空中を立体的に動くフェイト達には当たらず  
？4の効果が切れてしまう

ヴィータ「今だぁ……！」

フェイト・ギンガ・ノーヴェ「はっ……！」

攻撃が止み、その一瞬の隙を待っていたヴィータが3人に合図  
Aランク以上の魔導師三人が同時にバインドを仕掛ける  
本来なら解除不能に近いバインドなのだが

EXジョーカー「グルオオオオオオオオ……！」

力技で強引にバインドを破壊しようとする

フェイト達はカードリッジを何発か消費するが

EXジョーカーの異常な力にバインドにひびが入る

ヴィータ「これで決める……轟天……爆砕……！」

愛機グラーフアイゼンがギガントフォームに巨大変形  
カードリッジが四発消費され

ヴィータ「ギガントオ……シュラアアツク……！」

ドガアアアアアアアア……！！

フェイト、ギンガ、ノーヴェが攪乱と牽制

最も破壊力のあるヴィータが叩く

作戦がはまり、EXジョーカーは超重量級の攻撃を諸に受け  
周囲は広範囲に渡って陥没している

ヴィータ「はあはあ…どうだ？」

フェイト「非殺傷だけど…生きてる…よね？」

鉄槌の騎士の超重量攻撃をノーガードで諸に受けては  
普通なら非殺傷でも物理ダメージはかなり大きい

だが

EXジョーカー「はああああ」

超重量攻撃をもともぜず、EXジョーカーはノーヴェ達を見据えていた

フェイト「そんな！」

ギンガ「諸に受けたのに…」

ノーヴェ「ありえねえ」

ヴィータ「何なんだよ…コイツ…」

どんなに強力な攻撃を与えても、いつこうにダメージを受けない  
目の前の異形に恐怖を通り越して呆然とする四人

EXジョーカー「ふん」

四人「『『『カード？』』』」

「?6・?6・?6・?6・?K フォーカード」

四人を尻目にラウズカードをEXラウザーに読み込ませ

フォーカードを発動

雷、炎、風、氷属性のエネルギーがEXラウザーに集まる

ヴィータ「風と氷まで使え…!!」

四つの属性を纏ったEXラウザーで

超重量攻撃で消耗したヴィータに切りかかる

フェイト「ヴィータ!!」

高速でヴィータの前に立ち

バリアを展開するフェイト

ギンガ、ノーヴェも共にバリアを展開

フェイト、ギンガ、ノーヴェはカードリッジを消費し続けバリアを  
強化

ヴィータも残った魔力で防御にまわるが

EXジョーカー「グルラアアアアアア!!」

ズガアアアアアアアア!!!!

四人「くくくうっ……ぐ……」

EXジョーカーの攻撃によるダメージと  
魔力をフルに使った疲労で動けない四人

EXジョーカー「はあ……はあ……ふう……」  
若干息が乱れるがすぐに整える

そして

ノーヴェ「ぐっ……このお……」

ノーヴェの首を右手で掴み上げ  
EXラウザーを突きつける

ヴィータ「よせ……！」  
フェイト・ギンガ「止めて……！」

ヴィータ達の叫びもむなしく  
ノーヴェに止めを刺そうとするEXジョーカー

しかし

一つの傷口がEXジョーカーの攻撃を止める

EXジョーカー（！？……これは！）

先程の戦いでEXラウザーで切りつけたノーヴェの左腕  
その傷口からは機械が顔を覗かせていた

\* \* \* \* \*

アタシみたいな『訳あり』でも

\* \* \* \* \*

ノーヴェと初めて会ったとき、彼女が言っていた言葉が  
EXジョーカーの、カズマの頭の中によぎる

ノーヴェと対峙したとき、僅かでも知った顔であろうと  
管理局の魔導師として立ちはだかるのであれば、彼女を殺すつもり  
だった

88

『訳あり』

目の前の機械の体

それらがEXジョーカーの精神を乱し  
気付けばEXラウザーを引っ込め、ノーヴェをはなしていた  
EXジョーカーからは戦闘の意志が消え  
フェイト達から離れて、何かを大量に詰めた袋を手にする

ノーヴェ「はあはあ…てめえ…いつたい」  
止めを刺すのを止めたEXジョーカーに  
息を乱しながら突っかかる

バキバキ!!!

ギンガ「ノーヴェー!!」

そんなノーヴェエに頭上の瓦礫が崩れ落ちてくる  
自分達もノーヴェエも動けない  
全員が呆然とする中

「THUNDER」

4人「……えっ!?!」「……」

?6の雷で瓦礫を全て砕く  
雷が飛んできた方を見ると、EXジョーカーがノーヴェエの頭上に剣  
を向けていた

ギンガ「ノーヴェエを…助けたの?」

「THIEF」

フェイト「消えた!バルディッシュ!」

4人の思考が止まったとき  
EXジョーカーは?10を発動し姿を消した  
フェイトがバルディッシュに辺りを検索させるが  
敵はこの場から離脱したようだ

現在

フェイト達は、到着したシャマルや医療班の治療を受けている治療を受けながらはやてに状況報告

そんな中ノーヴェは

ノーヴェ（あの野郎アタシに止めを刺さず、あげく見逃すように消えやがって。）

姉の仇を取るどころか、仇に助けられ見逃してもらった形になってしまった

自分に対する怒りと同時に

EXジョーカーへの新しい敵意が生まれる

ノーヴェ side out

違法研究所の摘発から4日後

くミッドチルダ・都内く

ノーヴェ side

ノーヴェ「／／ううう…バカ姉責めえ…／／」

ふらふらと歩くノーヴェ

何故か髪と服が乱れ顔も赤い

服は第一ボタンが外れ、谷間が見えている状態だ

ドン！

ふらふら歩いていたので通行人とぶつかり

尻餅をついてしまう

???「すみません。大丈夫ですか？」

ノーヴェ「悪りい。こっちの不注意だ。」

差し伸べられた手を握り立ち上がるノーヴェ  
しかし、その相手は…

ノーヴェ「オマエ！」

カズマ「アンタは！」

人々が行き交う街で

一人と『一匹』は再び出会う



切札7：一人の機人、一匹の切札（後書き）

今回は、少し時間軸を戻し

街でカズマとノーヴェが出会うまでの出来事から始まります。

切札8：『訳あり』（前書き）

DEADPOOL ZERO AQUA様

酸欠帝SV様

感想を頂き、本当に有難うございます。

皆様の声を励みに

今後も精進していきますので、よろしくお願いします。

## 切札8：『訳あり』

くミッドチルダ・無人ビルく

カズマ s i d e

違法研究所での戦闘から四日後

カズマは現在

無人ビルで何かを組み立てている

都市部から離れた無人ビルや廃工場の並び建つ場所

カズマが図書館で最後に調べたのは、こういった廃墟となった場所である

人が近づかず、必要な機材はそこらの工場から探せるからだ  
第一候補は運悪く違法研究所があり、結果ノーヴェ達と遭遇したの  
で諦めた

その時、研究所から持ち出したのは金品と最新の機材、見えそうな  
道具である

カズマ「ようやく完成か。」

盗んだ機材と道具で、四日かけて造った青いパソコン

一見ただのノートパソコンだが、驚異的な情報処理速度と演算能力  
を持っている

ここに来て得たミッドチルダの科学力、『13人の魔導師』が使っていた特別性ストレージデバイス、そしてカズマの天才的頭脳によって造りだされたパソコンは、管理局のコンピューターとも戦えるスペックを持っている

性能テストもかねて、管理局のデータベースにハッキングをしかける引き出すデータは『戦闘機人』  
図書館で管理局や過去の事件について調べた時目にした項目  
ノーヴェの腕を見たとき非常に気になり、管理局から詳しい情報を盗み出す

極短時間で映し出されたデータは

カズマ「やはり、まともな組織ではないな」

機械をインプラントして肉体を強制強化  
不可能とされた技術を可能にしたジェイル・スカリエッティ  
裏で糸を引いていた管理局の闇

カズマ「何故、医療に応用しようという考えを持たないんだ？」

この技術は明らかに医療で大きく活躍する  
超高性能な義手義足を初め、難病に苦しむ人を助けることができる  
しかし、JS事件から歪んだ正義だけが広まり  
戦闘機人Ⅱ悪と決めつけ一方的に遠ざける

人を救える素晴らしい技術なのに

カズマ「まあ、人の事は言えないか」

管理局の歪んだ正義に腹立たしさを覚える一方で、自分も同じだと思っ

アンデッドの力は研究を進め、生物学・医学に役立てるはずだった  
しかし今は、その力を復讐のために使っている  
自ら異形となった自分も十分歪んでいる

カズマはパソコンを閉じ、新たな力を手にするため街へ出る

カズマ side out

〈都内・大学病院〉

ノーヴェ side

ノーヴェ「やあめえろおお！バカ姉貴い！！」

院内にノーヴェの声が響き渡る

ただ今、スバルのセクハラを受けている真っ最中だ

スバル、ティア、キャロの三人が入院している部屋

入院中のスバル達にお見舞いもかねて、違法研究所の摘発についての報告にきたノーヴェとギンガ  
ウエンディは更生プログラムの補習、チンクとウエンディはその見張りである

報告の際、スバルがE×ジョーカーに傷付けられたことに、ノーヴェが怒っていたことをギンガが伝えると

スバルが感極まってノーヴェに抱き着いた

最初は頬ずり程度だったのだが、今はノーヴェの胸を揉みまくっている

ノーヴェ「／／／ちよっ…ホント…止め…ふぁ…」

しだいに喘ぎ声が目立ち始め

スバル「かぶり」

ノーヴェ「／／／んんっ…あぁん…」

スバル「ふううう」

ノーヴェ「／／／ふぁぁぁぁん！…ふにゅ」

服に手を突っ込まれ胸を揉まれ

耳への甘噛みから甘い吐息を吹きかけるコンボで

ノックアウトされたノーヴェ

スバル「ふい、ごちそうさま。」

妹をたつぷり味わったスバルは、入院患者とは思えないほど血色の良い顔だった

その一部始終をギンガは「あららうふふ」とニコヤに見ていた

ティアは性教育に悪いとキャロの目と耳を塞ぎ

自身は真っ赤になりながらも最後までしっかり観戦

今は満足げな表情をしている

〈ミッドチルダ・都内〉

病院を出てた後、ギンガはチンク達の迎えに  
ノーヴェは一人家路につくために歩いている

スバルのお楽しみタイムの後なので、ふらつく足取り

ここでぶつかったのがカズマである

最初は気づかなかったが、黒いTシャツとジーンズ、フード付の青  
いジャケットの青年

怪我の治療をして、いつの間にか自分の家から姿を消したカズマだ  
った

カズマ「アンタ、その恰好はどうした？」

ぶつかった相手がノーヴェだと気付いたカズマは、尻餅をついてい  
るノーヴェを立たせ

凄い恰好になっているノーヴェに問いかける

ノーヴェ「あ？……：／／／！！」

カズマの問いに、自分が街を歩くにはとんでもない恰好になってい  
ることに気が付き、急いで乱れた髪と服をなおす。

ノーヴェ「／／／こっこれは……違っ……その……」

変な誤解をされないよう、必死に弁解しようとするが言葉がうまく

出てこない

ほぼ赤の他人であるカズマに弁解する必要もないのだが  
何故か、カズマに変な想像をされるのが嫌だった

カズマ「よく分かんないけど、アンタ時間あるか？せっかく会った  
んだ。この前のお礼とお詫びがしたいんだけど。」

ノーヴェ「ノノノしてたんじゃなくて、されたのであって……って  
：時間？これから帰るだけだし、時間なら有るけど？」

自分の弁解を受け流し

いきなり予定について問いかけてくるカズマに戸惑うが  
特に予定も無いのでそう答える

カズマ「そっか。それじゃあ……あの店にしよう。」

ノーヴェ「えっ？おっおい！」

戸惑うノーヴェの手を取り、目に入ったファミレスに入っていく

ファミレス

店員「いらっしやいませ。」希望の席は「ございますか？」

カズマ「空いてるなら、一番奥の席で。」

店員「かしこまりました。」

奥の席に通される二人

ノーヴェ「なんで、こんな奥の席なんだ？」

カズマ「ここなら、聞かれることもないだろ。ほら、好きなのたのみな。」

ノーヴェ「成程。…食いもんで誤魔化せると思うなよ。」

緑の血について、姿を消した理由について聞いただすつもりだったノーヴェ

ここなら、多少声を大きくしても周囲に聞かれないと納得する食べ物で誤魔化されるつもりはないが、とりあえず注文を決める

しばらくすると、ノーヴェにはサンドイッチとオレンジジュースカズマにはピラフとアイスコーヒーがとどく

現在午後二時半

注文を終え、店員も来ることもないので遅めの昼食を取りながら本題に入る二人

ノーヴェ「で？何で姿消したんだ？アタシは大人しく待ってけって言ったよな？」

料理を口に運びながら、最初の疑問を問いかける

カズマ「……家族が返ってきたし。女の子の家いきなり男がいたら騒ぎになるだろ。お互い面倒なことになるから出てっただけだ。」

本当は全然違うのだが、こう言えばこれ以上突っ込こんでこないと思ひ答える

ノーヴェ「ぶはっあ！ばっバカかてめえ…げほげほ…何言ってるんだ！」

\* \* \* \* \*

「彼氏を連れてきたっスね」

\* \* \* \* \*

まさか、ウエンディと似たパターンの答えが返ってくるとは思わず、口の中のモノを詰まらせ咳き込むノーヴェ。急いでジュースで流し込む。

ノーヴェ「はあはあ…じゃあ次。…お前の…体について。」

姿を消したことについては、もう突っ込まないこととして次の疑問を気まずそうに尋ねる

思い通り深く突っ込まれなかったのは良かったが

新しい疑問の答えに困るカズマ

さっきのような都合の良い嘘も思いつかないので結局

カズマ「管理局といろいろあってね。こういう体になった。…  
真実を答えた。ただし、過程を大きく省いて。」

ノーヴェ「そっか。やっぱり管理局か。…アタシの…」

カズマ「いいよ。」

ノーヴェ「え？」

自分の『訳あり』を話そうとするがカズマが遮る

カズマ「アンタの『訳あり』は聞かない。今は家族と楽しんでるんだろ？わざわざ嫌なことを話す必要はない。」

半分本気で半分嘘

半分は、既に詳細を知っているから聞かなかつただけの事

半分は彼女も被害者。今は管理局に近いとはいえ苦しめる相手ではないと思ったから

ノーヴェ「何だよ……これ以上詳しく聞きけねえじゃん。」

アンフェアを嫌うノーヴェ

本心は詳しく知りたいと思っているが

自分の秘密は伏せ、相手の秘密を一方的に知るの嫌だった  
断る相手に無理やり秘密を押し付けることも

その後は料理を食べ、会計を済ませて店を出る  
当然カズマのおごり

時刻は夕方に差し掛かろうとしている

カズマ「じゃあな。」

ノーヴェ「おう。」

店を出て二人はわかるる

くミッドチルダ・住宅地く

ノーヴェ「……そういえばアイツ、どこで寝泊りしてんだ？」

あまりにも自然にあっさりとわかれたが  
家路につく途中で、カズマに対する新しい疑問が生まれた

ノーヴェ side out

くミッドチルダ・都外く

カズマ side

カズマ「あっ！！機材買うの忘れた。」

アジトに戻る途中で本来の自分の目的を思い出す  
EXラウザーの転送機能を強化するためには、廃墟にあるパーツで  
は足りず

機材を買うつもりで街に出たのだが  
ノーヴェと食事をしていたら、完全に忘れてしまっていた

カズマ「何をやっているんだ…俺は」

アンデッドの能力を今だに使いこなせず  
少し境遇が可愛そうだからと相手に同情し  
あげく、目的を忘れて行動してしまう

「オマエでは悪を演じるのが限界だ」

自身の情けなさに苛立っているとまた声が聞こえた  
かつての戦友の声か

カズマ「ウルサイ！仲間のためにも、自分のためにも。今は不完全  
でも、すぐに『心』を捨ててやる。」

戦友の声を振り払うように

自分に言い聞かせるように

そう叫んだカズマは

誰も居ない世界に戻っていく

切札 8 : 『訳あり』 (後書き)

今回はカズマとノーヴェをさらに近づけるつもりです。

切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男（前書き）

霊宮空刀様、聖徳太子様

感想を頂きまして、ありがとうございます。

自分の中で誤字脱字をどうにかせねばと考えており

10話を投稿したら（切がいいので）

一度、総チェックをかけます

今回のタイトルがこのようになっておりますが

内容的には「ナカジマ家編 前編」となっております

## 切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男

未確認生命体についての報告書

新暦XX年X月X日

機動六課・屋外訓練場に突如出現。自主練習中だったフォアードメンバー四人を一瞬で戦闘不能に追い込む。外見はカミキリ虫に酷似しており、黒い全身に所々に青いライン。刺刺しい右半身が特徴である。

驚異的な戦闘力を持ち、高町なのは一等空尉の「スターライトブレイカー」をも凌ぐエネルギーを持っていることが確認されている。機動六課襲撃後、五日間姿をくらませていたが、違法研究所の摘発の際に再び遭遇。ヴィータ三等空尉、フェイト・T・ハラオウン執務管、ギンガ・ナカジマ捜査官、ノーヴェ・ナカジマ（協力者）の四名と戦闘になるが、捕獲どころかダメージを与えることさえできなかった。四名を圧倒した後、再び逃走。四日以上その姿を見せていない。

未確認生命体からは魔力反応が一切なく、雷、炎、風、氷の四つの属性を操り、異常な戦闘力から犯罪組織が造りだしたのではないかと推測される。我々は危険性が高いと判断し、今後遭遇した場合は、『殺傷設定』による討伐を最優先する方向性で捜査を続ける。

機動六課総部隊長・八神はやて

〈機動六課・会議室〉

## 六課 side

はやてが、これまでの情報をまとめた未確認生命体（EXジョーカー）についての報告書を使い、会議が行われている。参加メンバーは

はやて、フェイト、ヴィータ、シグナム、シャマルの六課組  
ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディの増援組  
計10名

ギンガ「あの研究所と未確認生命体は関係無かったってことですか？」

はやて「せやねん。逮捕した研究員二十数名を取り調べたんやけど、全員が否認しとる。押収した資料やデータからも、未確認に関するモノは一切なかったし。間違いないわ。」

EXジョーカーに関する情報が少なく  
摘発した研究所からも、期待したデータが得られず  
会議は難航していた

フェイト「しばらくは、摘発候補の研究所からあたっていくしかないさそうだね。」

シャマル「もう少しで専用サージャも完成するそうです。それまで頑張りましょう。」

シャーリーは既に、これまでのデバイスの記録からEXジョーカーの生体パターンを収集し、専用サージャの作成に取りかかっている

た。しかし、完成にはまだ時間がかかる。

それまでは、六課主要組が未確認（EXジョーカー）と関係があり  
そんな研究所をピックアップ。摘発時に増援組の力を借りるとい  
事で会議は終了した。

増援組はここで解散だが、主要組は怪しい研究所をピックアップす  
るため会議室に残る。

ギンガは108部隊に用があるため、会議終了後、ノーヴェ達とわ  
かれた。

六課 side out

くミッドチルダ・都内く

カズマ side

元OL「助けてくださあああい！」

カズマ「えっ？おっ？？」

この前買い忘れた機材を購入し、アジトに戻ろうとしていたカズマに  
OLらしき女性が助けを求めて走ってくる

どうでもいいが、このOL  
上司を蹴り飛ばしクビになったばかりだ

元OL「向こうで女性達が、ガラの悪い管理局員に絡まれてるんです。」

カズマ「いや…なんで俺なの？近くに他に男がいたでしょ？」  
至極当然の疑問を元OLに投げかけると  
かえってきた返答は

元OL「あなた、私の彼に似たようなモノを感じるの。ほら早く、  
男でしょ。」  
無茶苦茶な理由だった。呆気に取られているカズマを強引に現場に  
連れて行く

現場につくと確かに二人の局員の制服を着た男が  
四人の女性に絡んでいた  
周りの人間は気にはするものの  
管理局の制服を見て足早に立ち去る

カズマも今は面倒事を避けたいので  
その場を去ろうとするが  
一人の知った顔を見て気が変わる

カズマ side out

ノーヴェ side

ギンガとわかれ、家に向かっていた途中  
ノーヴェ達二人の男性局員が声をかけてきた  
始めは軽い感じのナンパだったのだから  
そのしつこさは増して

局員1「少しだけでいいからさ。」

局員2「俺達は他の奴らとは違うよ。ちゃんと人として見てるから。」

JS事件以降、ノーヴェ達は正式な更生プログラムを受け  
ナカジマ家の元で懸命に生きている

しかし、彼女らを避ける者は多い  
いや、避ける者はまだいい  
厄介なのは、彼らのような存在だ  
容姿の整ったノーヴェ達を狙って付きまとつ者もいる

「人として見ている」と言っているが、要は体目当てだ

ノーヴェ (こいつら...)

デイエチ（ノーヴェ、ダメ！）

キレかかっているノーヴェを抑えるデイエチ

自分達が面倒を起こせば、ゲンヤ達に迷惑がかかる

正当防衛でも、こういった輩は肩書を使って自分達の証言を潰す

それが容易に分かるからノーヴェ達は強い抵抗を我慢している

相手も、それを理解しているので強気にノーヴェ達に絡む

局員2「ほらあ、遊びに行こうよ。」

ウエンディ「ノノノ!?」

男の一人がウエンディのお尻をいやらしい手つきで撫でまわす

デイエチ「ウエンディ!」

ノーヴェ・チンク「てめえ!!（貴様!!）」

我慢の限界を超えたノーヴェとチンク

反撃しようとした

その時

局員1「ごぶっ」

局員2「がはっ」

ノーヴェ達が反撃するよりも先に

二人の局員は、一人の青年に殴り飛ばされる

その青年は

ノーヴェ「カズマ」

絡まれているのがノーヴェだと知り  
助けに入ったカズマだった

局員1「いつてえ！何だオマエ！」

局員2「管理局員を殴るとは、勇敢じゃん。」

一人は怒りをあらわに、もう一人は嫌味を交えてカズマに言葉を浴  
びせる

そのままカズマに殴りかかるが

局員「ぐはっ！！！」

局員の攻撃を腕を使ってさばき、カウンターキックを何度も叩き込む  
肉弾戦では勝てないと悟った局員はデバイスを起動させようとする

ナンバーズ「危ない（っス）」

デバイスを使われてはさすがに危ない

四人はカズマの加勢に入ろうとするが

局員「なにっ！！！」

起動させる前に、局員から待機状態のデバイスを奪い取り

ポイ！

通りかかったトラックの荷台に投げ込む

デバイスを乗せたままトラックは走り去る

カズマ「デバイス無くしたら、始末書じゃ済まないんじゃないの？」

いかなる理由が有ろうと、デバイスをなくした局員には重い罰が与

えられる

場合によつては懲戒免職もある

局員1「この野郎……」

局員2「おい、急いで追うぞ。」

遠ざかるトラックを追って走り去る局員

そんな二人を、カズマはただ見ていた

元OL「やっぱり、純一（彼氏）にそっくり！」

カズマを強引に連れて来た元OLは  
そう言つてどこかに行つてしまった

がば！

カズマ「????」

ウエンディ「アンタ凄いつス！カッコいいつス！アリガトウッス！  
！」

カズマに抱き着いてお礼と絶賛をするウエンディ

ディエチ「こら！抱き着いちゃダメでしょ。すみません、助かりました。」

ウエンディを引き剥し、お礼を言う

チンク「礼を言うぞ。」

ノーヴェ「ノノありがと」

チンクとノーヴェも続く。ノーヴェは少し照れくさそうに

カズマ「別にいいさ。じゃあ俺はこれで……」  
ノーヴェ「待て。助けてもらったんだ、お礼させる。」  
帰ろうとするカズマの手を取って引き留める

ウエンディ「そうっす！お礼がしたいっす！」  
空いているカズマの手を握るウエンディ

チンク「誰かが言っていた。小さな恩を受けたら大きな恩で返せと。」

「  
ディエチ「全然小さな恩じゃないけど……でも、迷惑でなければ是非。」

チンクもディエチも迫る

こうしてナンバーズはお礼としてカズマを近くのファミレスに連れて行った

ファミレス

アルバイト店員「いらっしやいませえ。五名様ご案内です。」

五人が入ったのは、この前カズマとノーヴェが食事をした店  
昼時とあって、この前より混雑している  
そんな中、偶然にも以前と同じ奥の席に通された

それにしても、やる気の無い店員である

席に通され

壁側の席にノーヴェ、カズマ、ウエンデイの順で  
通路側の席にチンク、デイエチの順で座っている

ウエンデイはカズマが余程気に入ったのか  
かなり密着している

ノーヴェはカズマと微妙な距離をとっている

食事を取りながら、お互いに自己紹介をしていた

ノーヴェとカズマは少しだが面識があること

以前同様、ほんの少しだけ

『訳あり』についても

一通り話した後、先程気になったことを

カズマはノーヴェ達に尋ねる

カズマ「アンタ達、なんで反撃しなかったんだ。俺の印象だとアイ  
ツ等よりアンタ達の方が強い。それに、どう見てもアイツ等の方が  
悪いのに。」

デイエチ「私たちが面倒を起こすと、お父さん達や面倒をみてくれ  
る人達に迷惑がかかるから。」

チンク「我々は、まだ完全に信用されていないからな。まあ当然だ

が。」

ノーヴェ「アイツ等、それをいいことに……」

ノーヴェの拳が強く握られる

カズマ（そんなことだろうと思ったよ。）

管理局の現状を知っているカズマは

絡まれているのがノーヴェだと知ってすぐに理解した  
立場上、反撃できないことを

気付けば助けに入っていた

ウエンディ「だから凄く助かったっす。改めて、アリガトウっす！」

デイエチ「ありがとうございます。」

チンク「ありがとう。」

ノーヴェ「／＼あ・あ・あ・ありがとう。」

ありがとうーブレイドー！

カズマ「……っ……っ……」

がたん

デイエチ「どうしたの？大丈夫？」

カズマ「ああ…大丈夫だ…」

ノーヴェ達のお礼を聞いた途端  
頭を左手で抑えよろめく

カズマ（何で…今さら）

ありがとう

かつてブレイドとして戦っていたとき  
何度も聞いた言葉

その言葉に幾度となく勇気をもらった  
その言葉があれば、どんな強敵にも立ち向かえた

カズマ（もう…俺には…）

今ではその言葉も心を乱すだけ  
その言葉を貰う価値を  
自分で捨てたのだから

うおおおおおおお！！  
パチパチパチパチパチ！！

突然、店内に歓声と拍手が沸き起こる

どうやら

あのやる気のないアルバイト店員が  
マナーの悪い客を頭突きで  
ノックアウトしたらしい

料理を食べ終わったので、会計を済ませる五人  
カズマの分はノーヴェ達が出し合った

会計の際

先程のアルバイト店員の男が  
「またクビかあ。新しいバイト探さないと。」  
と言って店を出て行った

その男が店を出ても、姿が見えなくなるまで  
拍手と声援が止まなかった

ノーヴェsideout

くミッドチルダ・無人ビルく

カズマ side

カズマ「どうしてこうなった」

現在カズマは自分のアジトで正座中

左頬は赤く腫らした彼の前には  
頬を染め、涙目でカズマを睨むウエンディ  
やや怒り気味のノーヴェエが立っている

切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男（後書き）

というわけで

ノーヴェのライバルはウエンディになりました。

今回はナカジマ家に行きます

ゲンヤさんの器のでかさをうまく表現できるか心配ですが  
しよばい管理局1、2と違い  
偉大なゲンヤさんをごんばって書きます

あと、この物語の真の悪を登場させます。  
EXジョーカーの相手にふさわしい  
悪にしていきます。

切札10：動き出す男（前書き）

聖徳太子様、kame様、紫騎士様、W・B・S様  
感想をいただき、ありがとうございます。

紫騎士様

作品を楽しみにしております。

今回、この物語の真の敵キャラが登場します。  
設定は『オリジナルキャラ』をご覧ください。

## 切札10：動き出す男

〈ミッドチルダ・無人ビル〉

カズマ s i d e

カズマがアジトに戻ろうとしたとき、ノーヴェがカズマの住んでいる場所を尋ねてきた。最初はどうしたものかと考えたが、案内することにした。「当たり障りのない、それでも事実を目にすれば人は大抵納得する」。それがカズマの自論だった。それに、管理局の動向を常にチェックできるカズマにとって、アジトを見せることは大したリスクにはならない。さっさと移動すればいいだけのこと

そう思って連れてきたのだが、カズマにとって面倒な展開になった

ノーヴェ達が見たのは、ソファアーとわずかな水と食糧があるだけの無人ビルの一室（パソコンや研究所から持ち出したものは隠してある）。その寂しい光景に、ノーヴェ達は何も言えなかった

『訳あり』同志でも、現状は全く違う

自分達には温かい食事、理解ある家族と仲間ができた

しかし、カズマがいるのは雨風をしのぐだけの寂しい世界

ノーヴェ達はそのように解釈してしまったのだ

ウエンディ「カズマ。家に来るっス。」

デイエチ「ウエンディ、いきなり何言い出すの？」

唐突な発言に戸惑う一向。

ウエンディ「ここは寂しすぎるっス。恩人をパパリンやギンガさんにも紹介したいし、せめて今晚だけでも夕食を一緒…「必要ない」っえ？」

言い終わる前にカズマの言葉が遮る

カズマ「俺は人であることを捨てたんだ。アンタ達のように、今更人として懸命に生きていこうなんて思っていない。誰かを求めようとも思わない！」

カモ手に入れた。知識も手に入れた  
本格的に復讐劇を始める自分に居場所など必要ない  
強い信念を表情にだして言い放った

しかし

カズマの目的を知らないノーヴェ達には  
悲しい表情にしかみえない

スパアアン！！

カズマ「?!?」

決意を新たにしたただだったのに  
いきなりビンタされたカズマの頭に？マークが並ぶ

ウエンディ「ノノノカズマ…正座するっス…」

カズマ「は?」

ノーヴェ「いいから正座あ!!!!」

カズマ「???はい。」

自分のアジトでなぜ正座？

ウエンディにいたっては頬を染め涙目になっている

少し離れた所にいるチンクとディエチは真剣な表情でみている

ウエンディ「ノノノカズマ、悲しいときは素直に助けを求めろっス。」

ノーヴェ「無理に強がってんじゃねえ。見てて痛々しいだけだったの。」

.....????

カズマ（どうしてこうなった。第一、彼女らはどういう思考で人の話を解釈してんだ？）

正座中の自分に話しかける二人を無視して、現状の把握をおこなう

ウエンディ（ふふん。戸惑ってるツすね。学んだ通りっス。）

ウエンディは、はやてからの特別講義で学んだことを実行していた。

「女の武器は涙」「言う事を聞かせたい男に使うと効果的」という内容だった。反論してこないカズマを見て、成功したと思い込んでいる。

特別講義を終えたはやての報酬には

「息抜きもいいいけど、お仕事しようね。」

という、魔王からの笑顔が送られたとか

ウエンディ「立つっス、カズマ。」

ノーヴェ「立て。」

ウエンディとノーヴェは考え込むカズマを立たせ

それぞれ両腕に抱きかかえる

デイエチ「お父さんとギンガさんにも連絡しておく。」  
チンク「恩人に、そう悲しい表情をされてはな。」

デイエチとチンクも少なからずカズマが気に入っている  
何よりこの寂しい世界が好きになれない  
以前なら、こんな世界を見てもなんとも思わなかったのに

四人は戸惑うカズマを  
誰も居ない世界から連れ出していく

カズマ s i d e o u t

? ? ? s i d e

誰も居なくなつたカズマのアジトに  
一人の男が入り込む

???? side out

ゲンヤ side

〔ナカジマ家・食卓〕

ギンガ「妹達を助けていただいて、有難うございます。どうぞ召し上がってください。」

ゲンヤ「味は保障するぜ。遠慮なく食べてくれ。」

カズマ「それじゃあ……いただきます。」

カズマの前には沢山の料理が並んでいる。ディエチ達がギンガに連絡し準備してもらったものだ。

ゲンヤはカズマと出会うなり、「娘達を助けてくれてありがとう。まああがってくれ」とバシバシ肩を叩いて中に案内をした。

最初はちよつとした宴会状態だったのだが

ウェンディがカズマに抱き着いて、先程ビンタした頬を優しくなでたり（はやてから教わったもの）、「行儀が悪い」と注意したノーヴェに「羨ましいっスか？」とウェンディがからかい、そのままどつき漫才に突入。ディエチやチンクが止めに入ってからさらに混沌と

し、その様子をギンガがニコヤカに見守っていたりと騒がしいことこのうえない食事となった。

そんな中、ゲンヤはカズマを終始見ていた

くナカジマ家・中庭く

女性陣が後片付けをしている中

カズマとゲンヤは外に出て夜風にあたっていた

ゲンヤ「あらためて、娘達を助けてくれてありがとうよ。周りの反応が中々な…。情けない話だ。」

カズマ「いえ、別に。」

あらためてお礼を言うゲンヤ。そのまま本題に入る。

ゲンヤ「デイエチ達が電話で頼んできたんだよ。恩人が悲しい表情をしている。寂しい世界にいるから助けてほしいってな。でも、俺はお前さんを見てて、今はほっとくべきだと感じた。」

意外な言葉がだった

正直、いろいろ聞かれると思っていた

ゲンヤ「お前さんは悲しいんじゃないねえ。これからすべきことに迷いを感じてんだ。」

カズマ「何を言ってるんですか？俺は別に……」

カズマは復讐を誓ってここに来た。最初こそイレギュラーが続き戸惑いがあった。しかし、今は違う。力だけじゃない。この世界の知識を手にした。管理局に対する憎しみに一寸の迷いは無くなっていた。

しかし、

ゲンヤ「仮にも上に立つ人間だ。いろんな思想をもった部下や犯罪者と向き合ってきた。だから、光を持って突き進む奴と、どす黒い闇を持っている奴。両方の人間の心を知ってるつもりだ。」

だから何だと言いたげなカズマを気にせず、ゲンヤは続ける

ゲンヤ「お前さんの今の心はほぼ闇だ。管理局に対する憎しみがよく伝わってくる。だが、僅かだが光も残っている。それを捨てきれないから、すべき事を迷ってたんだ。違うか？」

カズマ（……っち！！）

凶星だった。憎しみは本物だ

しかし、ほんのわずかに残った正義感を捨てきれない

よりもよって憎む組織の人間に認めさせられてしまうとは

カズマ「それだけ分かってるならどうします？光を選ぶように説得しますか？それとも危険分子として逮捕しますか？」

ゲンヤ「どっちも必要ない。光は自分で選ばなきゃ価値がねえ。無理に選ばせても苦しませるだけだ。危険分子だから逮捕なんてもつての他、そんなのただの暴挙だからな。」

カズマは完全に黙ってしまった

ゲンヤ「冷えてきたし戻ろう」

そう言って、カズマ肩を叩き部屋に戻ってく

戻った二人に何を話してたのか尋ねる娘達に

「男同志の話だ」

とだけ伝えた

くナカジマ家・玄関く

ナカジマ家を後にしようとするカズマ

「やっぱり、あそこに戻るの？」とデイエチが尋ね

「あそこは寂しいっす。ダメっす。」とウエンディが引き留めるが  
強制は良くないとゲンヤが止める

そのゲンヤが帰り際に

「光を選ぶ気になったら家に来い。今後の相談にのってやる。」

と伝え、去りゆくカズマの背中を見ていた

経緯は知らないが

ノーヴェ達の事情を知ったうえで助けてくれた男

光を選んでくれると信じたい

しかしどうしようもない不安も感じていた

光があるとはいえほんの僅か

それだけカズマから感じた闇は深かった

ゲンヤ side out

くミッドチルダ・廃墟く

カズマ side

カズマがアジトに戻ると気になるものがあつた机の上に、黒と白の二枚のCDケースがメモと一緒に置かれていた内容は

「迷いを消したければ、黒いCDを再生しろ」

と書かかれていた

この場所を知っているのはノーヴェ達を除いて誰もいないはず。管理局が突き止めた？しかし、それなら自分がアジトに戻った瞬間、攻撃をしかけるはず。そもそもCDは何のため？

カズマ「まあいい。罨に足を踏み入れてやる。」

何があるのかは知らないが、手掛かりがあるなら使っしかないカズマは隠してあつたパソコンを取り出しCDを読み込む

中身は録画映像だった

見た目50代の男が映し出されている

その男は次の瞬間

とんでもないことを口にする

???「初めまして、カズマ君。いやEXジョーカー。」

カズマ「何!？」

ありえない。なぜ知っている？

驚くカズマに構わず映像は進む

???「私は…そうだね…今は55 フィフティファイブ とでも言っておくよ。今55歳だからね。」

画面の男は適当に名乗るが、カズマにはどうでもよかった

55「混乱しているだろうが聞くだけ聞いてくれ。君にとって非常にメリットのある情報だ。君は管理局に復讐をするためこの世界に来た。54番目のアンデッドになって。」

カズマ「こいつ…いつたい…」

EXジョーカーをアンデッドであると理解している

驚きや困惑を通り越し、この男に興味がわいた

55「しかし、ここにきて心に迷いが生まれている。心がほぼ闇に染まりつつも、生来の正義感という光を捨てきれず復讐に徹しきれない。そんな君の光を取り払ってあげよう。」

カズマは黙って続きを見る

55「もう一枚、白いCDがあるだろ。そこには、君のハッキング能力ではたどり着けない場所の情報が詰まっている。見るかどうかは自由だが、これだけは断言しよう。今のままでは管理局に勝てない。どんなに力を持っていても、悪にも正義にも徹しきれない半端者が勝てるほど戦いは甘くないよ。それでは、後は君に任せる。」

最後は挑発する形で映像が終わるが  
カズマには関係ない

今は集められるだけ情報を集める  
それだけだった

カズマは白いCDをセット  
画面にでた内容は

「第13管理外世界襲撃事件の真相」

カズマ side out

六課 side

↳機動六課・会議室

カズマがナカジマ家で食事をしていた頃

機動六課では主要メンバーが緊急召集されていた

未確認（EXジョーカー）討伐のために、有効戦力があると名乗りを上げた一人の局員がいた

その局員の紹介と内容を聞くために集められたのだ

はやて「ほんなら、自己紹介からお願いします。」

「???」「はい！」

そう言っただけで立ち上がる、見た目50代の男

ヨシト「情報管理部総責任者兼デバイス開発部研究員、ヨシト・プロスペクトです。よろしくお願いたします。」

ヨシトと名乗るその男は

黒いCDの映像の男だった

彼の持ってきた資料に書かれたタイトル

それは

「次世代型デバイス・トライアルシリーズ」

運命のカードがめくられた

切札10：動き出す男（後書き）

ゲンヤさんを書いていて思いました。

良い男を書くのって難しい。

評議会や局員1、2のように、小さい男は楽でいい。  
書き手にとって重宝します。

## オリジナルキャラ（前書き）

プロスペクトは演じる方が同じだったので  
苗字として付けました

アイズドールパントには変身しません

トリアルシリーズは外見も能力も原作と同じですが  
トリアルBに関しては若干オリジナル要素を入れます。

登場順も、多少前後するかもしれませんが。

Eの前にGが出てきたり

## オリジナルキャラ

名前：ヨシト・プロスペクト

性別：男

年齢：55歳

出身：第14管理世界（通称バニティ）

所属：情報管理部総責任者

デバイス開発部研究員

外見：「仮面ライダー剣」の広瀬義人

未確認生命体（EXジョーカー）の討伐のための有効戦力があると、機動六課に現れた男。第14管理世界出身で、魔力適正は0。しかし、その卓越した情報技術を見込まれ、28歳のとき時空管理局から情報管理部にスカウトされ、40歳で総責任者に就任する。

天才的なハッキング能力と情報収集能力により、管理世界、管理外世界にある全ての情報と現状を常に把握していることから、『千里眼』の異名を持っている。

得た情報を全てを管理局に報告しているわけではない。都合の良いようにコントロールしている。

第13管理外世界で「アンデッド事件」が起こったころ、デバイスの研究も始めるようになり、今はデバイス開発部研究員も兼任して

いる。

『55 ファイファイファイブ』

ヨシトがカズマに接触した時に、名乗った偽名。

機動六課に協力する一方で、偽名を使ってカズマにも接触。

第13管理外世界襲撃事件の真相を伝える。

カズマは彼の正体を探ろうと管理局のデータベースにハッキングをしかけるが、局員データにも犯罪者データにも彼に関する情報は一切なかった。

『トリアルシリーズ』

ヨシトが開発した次世代型デバイス。人型をしており、魔導師が使用するのではなく、デバイス自身が戦闘を行う。本人は万年人手不足を解消する、子供を戦場に送り込むのを止めさせると言うコンセプトで開発したと公言。EXジョーカー討伐の有効戦力になると言っているが、トリアルシリーズの目的は討伐ではなく別にある。

トライアルD

トライアルシリーズの初号機。

プロトタイプとしてEXジョーカーと戦う。  
外見も声も原作と同じ。

トライアルE（イメージCV：天野浩成）

トライアルF（イメージCV：森本亮治）

トライアルG（イメージCV：北条隆博）

トライアルB（イメージCV：椿隆之）

## オリジナルキャラ（後書き）

『オリジナル世界』に

「第14管理世界」についての設定を加えました。  
よろしければご覧ください。

## 切札11：トライアルD（前書き）

kame様、聖徳太子様、酸欠帝SV様、紫騎士様  
いつも感想をいただき本当にありがとうございます。  
皆様のお言葉が、何よりの原動力です。

何やらトライアルDが悪役顔の味方キャラみたいになってますが…  
そんなわけはありません  
だってトライアルだもん  
天地がひっくり返っても味方にはなりません

## 切札11：トリアルD

〔機動六課・会議室〕

六課 side

機動六課の主要メンバーは、未確認（EXジョーカー）対策の有効戦力として

ヨシトが持ってきた、次世代型デバイスの資料に目を通していた

昨夜は、自己紹介と簡単な説明だけで終わり

今は、資料を見ながら本格的な会議を行っている

シャーリー「すごいです。これまでのデバイス理論とは根本的に違います。」

デバイスマスターでメカオタクのシャーリーは興味深々

他のメンバーが真剣な表情の中、一人興奮している

トリアルシリーズのコンセプトは以下の通である

- ・あらかじめプログラムされた通りに行動する
- ・プログラムは登録者『のみに』が設定・変更可能
- ・常に新情報を吸収しAIが進化し続ける
- ・Sランクの魔法にも耐えられる

ヨシト「プログラムを『犯罪者の逮捕』にすれば、どこまでも追いかけていきます。最終的には管理局の犯罪データベースと併用し、量産したトライアルで世界中の犯罪者の検挙も可能です。」

はやて「それに、万年人手不足も解消されるな。」

フェイト「もう、小さな子供を戦場に向かわせる必要もなくなるね。」

ヨシトの説明を聞き、トライアルシリーズの可能性に期待をよせる二人。

管理局の人手不足は、本人の努力よりも魔法資質の高さを一番の評価基準に置いていることにある。そのため、エリオやキャロのように小さな子供でも、魔法資質が高ければ戦いの最前線に送り込まれるのだ。

エリオやキャロは自分の意志で、戦いの場に身を置くことを決めた保護者のフェイトは当然反対したが、結局は本人達の強い意志を尊重することにした

だが、子供を戦場に出すのはやはり良いことではない

トライアルが本格導入されれば、もうそんな心配も…

ヨシトの資料からは、そんな可能性を感じさせてくれた

ヴィータ「でもよお。所詮デバイス、機械だろ？調査や探索ならともかく、デバイス単体が戦闘で活躍するとは思えねえな。」

ヨシトの資料に疑問をもつヴィータ

さらにシグナムも続く

シグナム「ヴィータの言うとおりだ。いかに高度なAIを持っていても、所詮は機械。応用が効かない。常に変則的事態が発生する戦闘では、人間に勝てないのでは？」

二人の意見は当然だ。戦闘において決まりきった事は存在しない。現存するデバイスの中で、最も高度なAIを持つインテリジェントデバイスも所詮は使用者のサポートでしかない。人間の柔軟性と併用することで初めて真価を発揮する。デバイスだけで戦わせるのは無理があるのだ。

はやて「まあ確かにな。ヨシトさん、そのデバイス今見せてもらえますか？」

資料には、コンセプトや性能については書かれていたが、デバイスの形状については何もなかったのだ、

とりあえず実物を見てみようという事になった

ヨシトは「わかりました」と答え、待機状態と思われる赤紫色のカードを取り出し起動させた

ガジェット・ドローンのようなメカニックなものを想像していた一同しかし、そこに現れたのは

トリアルD「……………」

はやて、フェイト、リイン「「「ひっ!!」「」  
ウィータ「うお!」  
シグナム「ほお」

全身が人工筋肉でおおわれ、体中からコードが伸びている。顔は髑  
髏を禍々しくした感じになっており、右半身と胸の部分が赤、左半  
身と顔は黒一色。妙に人間っぽく、それでいて機械的なフォルム。外  
見は、正直ヒーロー番組の怪人にしか見えない。  
はやて、フェイト、リインは悲鳴を上げ、ウィータは驚きの声を上  
げた。そんな中、シグナムだけは好意的な感触である。

ヨシト「どうです。これがトリアルDです。  
造った本人は誇らしげな態度

はやて「いや…どうと言われても…」

リイン「こわいですう」

返答に困るはやて

リインは泣きだしてフェイトに抱き着いている  
フェイトも若干涙目だ

シグナム「うむ、見た目は中々だ」

はやて、フェイト、リイン「「「えっ!?!」「」

シグナムを見る三人

はやてはシグナムの趣味に疑問を持つ

シグナム「だが、見た目だけでは無意味。Drプロスペクト、コイ  
ツの性能を確かめたい。私に模擬戦をさせてくれ。」

ヴィータ「とうとうデバイスにまで……」  
シグナムの戦闘狂は今に始まったことではないが  
デバイスにまで戦闘を申し込むシグナムに呆れる

ヨシト「かまいませんよ。なんでしたら、ヴィータ副隊長も参戦してはどうですか？直接戦えば、トリアルDの力をより理解していただけます。」

よほど自身があるのか、ヴィータまで誘い出した

ヴィータ「参加すんのは良いけど。知らねえぞ？そいつぶっ壊れても。」

ヨシト「大丈夫です。勝つのはトリアルDですから。」

ヴィータ「！！上等じゃねえか。何がSランク魔法にも耐えられるだよ。んなもんアタシが叩きつぶしてやる。来い、筋肉デバイス！」  
ヨシトの言葉に、平静を装っているつもりのヴィータ  
あっさり参戦を決め、トリアルDを連れて訓練場に向かう

その時、ヨシトは不敵な笑みを浮かべていた  
獲物を罠に追い込んだような

〈訓練場〉

シグナム・ヴィータ side

リン「シグナムさん！ヴィータちゃん！そんなデバイス叩き壊しちゃって下さいです！」

相当トリアルDが嫌いらしい

彼女の中では完全に怪人扱いとなっている

ヴィータ「任しとけ！粉々にしてやる！！」

腕試しから破壊に目的がシフトしている

はやて「怪我せんようにな。そんなら、模擬戦スタートや！！」

はやての言葉で模擬戦が始まる

スタートと同時にしかけたのはヴィータ

ヴィータ「うおおおおお！！」

グラーフアイゼンで勢いよく殴りかかる

トリアルDは左腕でガードするも

シグナム「がら空きだ…」

後ろに回り込んだシグナムがレヴァンティンで切りつける  
すかさずヴィータが

ヴィータ「吹っ飛べえええ!!」

グラーファイゼンのアッパースイングで  
トライアルDは上空に飛ばされる  
怒涛の攻撃はまだ続く

シグナム「飛竜一閃!」

ヴィータ「テートリヒ・シュラーク!」

シグナムは炎を放ち

ヴィータは思いっきり叩く

ドゴオオン

トライアルD「……………」

立ち上がるトライアルD

ボタン

カシャ

仰向けに倒れるとベルトのバックル  
トリアルバックルが開く  
戦闘不能の証のようだ

リイン「やったです！！参ったか、悪人顔デバイス！」

一人喜ぶリイン

しかし、他のものは呆然としている  
あまりにも呆気なく終わったからだ

シグナムとヴィータは

シグナム「なっ…Drプロスペクト、何だこれは…！」

ヴィータ「見かけ倒しにもほどがあんぞ…！」

反撃すらせず

戦闘不能になったトリアルDの弱さに怒る二人

ヨシト「お二人共、まだ終わっていません。トリアルの恐ろしさ  
はこれからです。」

カシャン

トリアルバックルが閉じ

立ち上がるトリアルD

ヴィータ「野郎！」

先程と同じく勢いよく殴りかかるヴィータ  
しかし

ヴィータ「なっ!?!」

トリアルDは左手でグラーファイゼンをつかんだ  
シグナムが、また後ろから切ろうとするが

シグナム「くはっ」

トリアルDはすぐさま反応し右足でシグナムの腹に蹴りを入れる  
そしてグラーファイゼンごとヴィータを投げ飛ばす

ヨシト「トリアルは常に情報を仕入れAIが進化し続けます。同  
じ戦術は二度と通用しません。」  
自慢げに伝えるヨシト  
それを聞いた二人は

シグナム「そうではなくてはつまらん。」  
ヴィータ「学習する前に、叩きつぶしてやる。」

見かけ倒しでないことに安心した二人  
がぜんやる気を出して、模擬戦を再開する

シグナムとヴィータは同時に攻撃をしかけるが

シグナム「ぐっ」

ヴィータ「がっ」

斬撃と打撃を巧みにさばき

カウンターを入れるトライアルD

ヴィータ「ラケーテンハンマー」

突進攻撃でトライアルDは吹き飛ば

ヴィータ「何だ？」

トライアルDは体制を立て直し

右手からコードを伸ばしてヴィータを拘束する

はやて「あんなんあり？」

ヨシト「頑丈さと学習機能だけではありません。当然、攻撃手段も搭載しています。」

はやての突っ込みに、あっけらかんと答えるヨシト

ヴィータ「ぐあああ」

とらえたヴィータを壁や地面に叩き付けるトリアルD

シグナム「空牙!!!」

剣圧を放つシグナムだが

トリアルDは左手から電撃を放ち相殺する

フェイト「雷の魔力変換もできるんですか？」

ヨシト「ええ。トリアル自体は魔力を持っていませんが、周囲に拡散した魔力を集め雷に変えて放ちます。」

魔導師が魔法を使用した時、僅かだが周囲に魔力が拡散する

それをエネルギーにしているらしい

それを聞いたはやて達は

トリアルの恐ろしさを理解しはじめた

シグナム「はっ!!!」

すかさずコードを切ってヴィータを解放



復活しすぐに攻撃をしかけてくるトライアルD  
防御から攻撃主体になってきた

ヴィータ《シグナム、アタシがコイツを引き留める。その隙にドデカい一発を頼む。短時間で大技を二発撃ちこみや、さすがにぶっ壊れるだろう。》

シグナム《承知した》

念話で伝えると、シグナムは距離を取り  
ヴィータはトライアルDの相手をする

シグナム「レヴァンティン！ボーゲンフォーム！！」  
剣と鞘を合体させ弓に変形させる  
カードリッジを消費し、矢に炎の魔力が集まる

シグナム「あいつめ……」

シグナムは矢を放てないでいた  
トライアルDとヴィータが近すぎて、今放てばヴィータも巻き込まれる  
それを理解しているのでトライアルDは大技の態勢に入ったシグナムを  
無理に対処せず、ヴィータに張り付いている

ヴィータ（まだだ……）



激しい爆発が起こり

トリアルバツクルが開かれる

フエイト「今度こそ壊れたんじゃ？」

誰もが同じことを思うが

ヨシトは余裕の表情を崩さない

カシャン

シグナム・ヴィータ「バカな！！」

トリアルDはまたしても復活

ヴィータ（この感覚、アイツと同じだ。）

何度攻撃しても、大技を叩き込んでも倒せない

EXジョーカーとの戦闘を思い出すヴィータ

あの時と同じ感覚が沸き起こる

はやて「そこまでや！！これ以上はアカン！シグナム達もヨシトさんも十分やる？」

これ以上は危険と判断し止めに入るはやて

ヨシト「もちろんです。トリアルの有能性は証明されたでしょ？」

満足したのか手元の端末を操作し、トリアルDを止める

シグナム「ああ、たいしたものだ。機械とは思えない対応力だ。」  
ヴィータ「くっそう。リミッター外したら絶対にぶっ壊す。」  
トリアルDを認めるシグナムと  
悔しそうなヴィータ

いいよのない恐怖も感じたが、結局は味方  
未確認（EXジョーカー）討伐の戦力として  
大きな希望が生まれた

その時

グリフィス「八神部隊長、大変です！未確認生命体が現れました。」

はやて「なんやて！」

部隊長補佐のグリフィスからの緊急連絡

映し出された映像には、EXジョーカーの姿が

周りに動かない人がいることから、ついに死者がたようだ

はやて「最悪のタイミングや…急いでギンガ達に連絡を」

重要戦力のシグナムとヴィータは模擬戦で消耗しきっている

急いでギンガ達を呼び寄せようとするが

ヨシト「必要ありません。トリアルDに行かせます。」

トリアルD「……………」

はやて・フェイト・リイン「……え？……きゃあああ！」「」「」

いつの間にか後ろには

無言で立っていたトリアルD

あれほどの激闘の中、まだ十分戦えるようだ

リイン「ひつぐ…えつぐ…」

ヴィータ「よしよし」

振り向くと画面いっぱいにはトリアルDの顔が

泣き出したリインはヴィータに抱き着き、頭を撫でられている

はやて「どんだけ頑丈なんよ…ほんまに大丈夫なんですか？」

ヨシト「ええ。でなければ、未確認討伐に推薦したりしません。」

自身満々に答えるヨシト

少し考えるはやてだが、守護騎士二人を相手に激闘を繰り広げ

それでもなお、戦闘可能

すぐに答えを決める

はやて「ほんなら、たのみます。機動六課よりトライアルD出動や  
！」

ヨシト「了解。トリアルD出動！」

手元の端末で操作すると

訓練場を高速で出ていくトリアルD

どうやら、走って現場に向かったらしい

はやて「うちらもいくで。」

シグナムとヴィータを残し

動ける者は全員現場に向かうため、ヘリの準備をする

皆が出て行った後、ヴィータが

ヴィータ「あんなの（トリアルD）が街中走ってたら、パニックになるんじゃないか？」

ごもつともな突っ込みをいれていた



## 切札11：トライアルD（後書き）

倒しても倒しても蘇ってくる

台詞は「オマエハ…ユルサレナイ…」

こんなのに追われた犯罪者は、急いで管理局の保護を受けてください

やっと出てきたリイン

性格がおかしいかもしれませんが、キャラ崩壊ということでは

トライアルが無言で後ろにいたら、誰だってビビるよ

明日から学校が再開するので更新ペースが落ちるかもしれませんが

今週中には続きをUPするつもりです

早く書けるようにがんばります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9553z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 紫紺の切札 ~

2012年1月9日03時48分発行